
銀王と...

Liar

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀王と…

【Nコード】

N5740T

【作者名】

L i a r

【あらすじ】

私は母と妹を守るために力を得て王となった。そしてある日一人の少女を拾った。少女の瞳はまるで…。

コードギアスLOSTCOLORSと魔法先生ネギま！のクロスオーバーです。 ライ王過去編 麻帆良学園

銀王と吸血鬼1（前書き）

ご指摘がありましたので、長編に投稿しました。

銀王と吸血鬼1

S i d e ・ エヴァンジェリン

はぁ……

またか……

と独り荒野を歩く私はため息をついた。

私の目の前にはローブを来た数人の男が現れ、彼らは私を睨み付けて息巻いていた。

3

「見つけたぞ！貴様が闇の福音、エヴァンジェリン・A・K・マグダウエルだな！？」

「貴様の首はいただく！」

「貴様の存在は危険だ！」

「全ては正義のためだ！！！」

ちっ、めんどくさい……

吸血鬼になって200年経ち、名前が知れ渡るようになって次から次へとこういうのが沸いてきた……

今も街から街を転々と歩いていた最中だ。

私が何をしたと言うんだ？

私は怯むことなく彼らを睨み付け

「また賞金稼ぎか……。それとも正義面した魔法使いか……」。

ふん、どちらでもいい……。そちらがその気なら私も相手をしてやるさ」

と彼らに冷たく言い放つ。

「はっ！いつまで余裕でいられるかな！？」

「死ねえええっ！」

私の言葉に激昂した男達は次々と私に襲いかかる。

反撃しようとする呪文を唱えようとした瞬間

「貴様等、そこで何をしている？」

よく通る男の声が響いた。

そこには白馬に乗った10代半ば前ほどの、銀髪で、

深い海のようなあるいは空のような蒼い瞳をもった眉目秀麗な男がそこにいた。

まさに美しいという形容がぴったりの男だった。

S i d e ・ ラ イ

最近、周りの国で怪しい動きがあるため視察をかねて数人の騎士を連れて遠征に来ていた。

地を知っていると言うことはそれで戦が有利になることもある。

自ら指揮をするためにも出来るだけ把握をしておきたいのだ。

その視察を終え、国へ帰る道中不愉快なものを見つけた。

それは数人の男達が、10歳ほどの少女に今にも襲いかかろうとしているところだった。

それを見た私は騎士達の制止の声を無視し駆け出した。

「貴様等、そこで何をしている？」

男達は私の声に驚き、動きを止めて私を見る。

「な、なんだよお前は!？」

「邪魔をするな!」

彼らがこちらに叫んでいる内に、騎士達もこちらにやって来た。

「陛下!!一人で飛び出して行かないでください!!」

「何のために私たちがついていているのでしょうか!？」

と叫ぶ騎士達にすまないと謝りつつ、少女を襲おうとしていた男達に尋ねた。

「もう一度聞く。貴様等、何をしていた？」

彼らは、うつと喉を詰まらせ逃げ出そうとした。

このような不屈き者を逃がすわけにはいかない。

「お前達、こいつらを捕らえよ！」

私は騎士達に命令を出し、彼らが捕えられるのを見届けて

じつとこちらの様子をうかがっていた少女に声をかけた。

S i d e ・ エ ヴ ア

「大丈夫か？」

騎士に男達を捕らえさせ、銀髪の男は馬から降りると、私にそう声をかけてきた。

先ほど陛下と呼ばれていたことからおそらく何処かの王で魔法関係者ではないと思われる。

男達もそれに気付いたのか、私を襲おうとしていた理由を言わず逃げ出そうとしたのだ。

魔法を使うわけにはいかない彼らは、騎士達に簡単に捕らえられていた。

そして200年ほど誰かから心配されるような言葉をかけられなかった私は、銀髪の男の投げかけた言葉にとっさに答えることができなかった。

私が黙って銀髪の男を見ていると彼は再び声をかけてくる。

「見たところ、怪我は無いようだな。しかし、お前のような子供がこんなところでなにをしている?」

「ふん、私が何をしようとか関係ないだろう?」

なっ 貴様っ 無礼だろう! 口の聞き方を慎め!

と後ろの騎士が怒るが銀髪の男はそれを片手を上げて静めさせて答えた。

「そうだな… たしかに関係は無いが…」

民を守る立場の者としては、こうして見つけてしまった以上放っておけないだろう?」

「ほう？ずいぶんとお優しい王様だな？

まあ助けてくれたことには一応礼を言っておくさ。」

そう私が答えると男はくっくつと笑い出して言った。

「お前は面白いやつだな。気に入った。

奴らに囲まれていたときもそうだったが、物怖じと言つものをしないらしい。

特にその眼が気に入った。

とにかく、私は王としてお前のような子供をこんな荒野を放って行くわけにはいかない。

私の名はライラル・フォン・ブリタニアと言つ。ライで良い。お前、名は何と言つ？」

「……エヴァンジェリン・A・K・マグダウエル」

名乗らず去ろうとしたが、先に名乗られてしまつては答えないのは義に反するので嫌嫌ながら答えた。

まあ、一般人までには私の名は知られていないだろう。問題は無いはずだ。

「そうか…エヴァンジェリン。一人でこのような荒野を歩いていた

のには何か事情があるのだろうか……

どうだ？私の城に来てみてないか？」

と言い私に手を差しのべてきた。

ライの提案に私は息をのむ。

そんなことを言われるとは思わなかった。

この手を取ってもいいのかわからない。

いや、取るべきではないのはわかっている。

私は闇の福音、真祖の吸血鬼だ。

正体を知らればどうなるかなど明白だ。

この男の言葉など無視してまた旅を続けることだってできる。

しかし、私は気が付くと男の手を取ってしまっていた。

何故手を取ってしまったのか、自分でもわからない。

ライは私を見てふと微笑んだかと思うと、そのまま私を抱き抱えて

馬に乗り帰るぞと騎士達に告げ走り出した。

最初は抵抗したが、今は落ち着けとライが言うと、どういっわけか落ち着いてしまった。

そうしてこいつの国へと帰る間、こいつに抱えられていて気が付いた。

そうか…私は…ぬくもりが欲しかったのだ……

今まで考えたこともなかったが、

本当は寂しくて、淋しくてたまらなかったのだ…

と。

200年ぶりに感じた人のぬくもりに、私は知らず知らずのうちにライの服をしわができるほどに掴んでいた。

S i d e ・ ライ

先ほどまで暴れていたが、今は落ち着くようギアスをかけておいた。

そして今、こうして私の胸に丸くなって私の服をつかんでいる少女を抱えながら思った。

えらく威勢のいい子供だと思っていたが、本当は寂しかったのだらう。

こうしてみると、やはりただの子供だったらしい。

この子供の眼を見たとき強い瞳だと思った。それと同時に何かを抱え込んでいるようにも思えた。

先の戦で親を亡くした子供なのだろうかとも思ったが、その辺りは国に帰って聞くとしよう。

なぜこの娘を城で保護すると言ったか。

王だから民を放っておけないという理由で毎回孤児を城に連れ帰っている、城が子供で溢れてしまう。

もちろん、孤児のための施設はあるのだ。

ではなぜわざわざ 城で と言ったか。

それは単純にこの子供が気に入ったからだ。

いや気に入ったというのではない。気になったのだ。

それだけではない、自分自身のためだ。

正直に言くと、初めて彼女の蒼い瞳を見たとき、背筋が凍りつくような感覚があった。

戦で感じるような殺気。いや、戦でもあのような感覚を味わったことはない。

殺気、諦観、悲しみ、怒り、そのような負の感情が流れ込んでくるような感覚。

どこかで見たことがあるような気がする。

そつだ、あれは私がまだ力を手に入れる前、母や妹とともに虐げられ、蔑まされていたとき、

いつか見た自分自身の瞳だった。

そつだ、私がこの娘を拾ったのは、きっと彼女に昔の自分を見たからだ。

なぜこの子供がそのような眼をするのか、純粹に気になった。

そしてこのような眼を、させておくべきではないとも思った。

私は母と妹を守るために、絶対遵守のギアスを手に入れたが、

この子供に、私と同じ道を歩んでほしくはない。

この力を手に入れたことに後悔はないが、それでも、正しかったとは毛頭も思っていない、

この力を手にすることなく、幸せになれるということも知っておきたかった。

知っておきたいというのはおかしいか……

見てみたいのだと思う。

私とは違う方法で幸せになれるということ……

この濁った蒼い瞳を、いつか澄んだ瞳にしてやりたい。

この娘を心から笑わせることができれば、私も救われるような気がした。

母や妹とともに、この娘も守ってやろう。きっとそれはこの娘のためなどではなく、私自身のためなのだ。

ふっと自嘲の笑みを浮かべた。

我ながら最低だなと思いながら私の胸で丸くなって顔を隠している少女を見やり

抱えていた腕を先ほどよりも強く抱きしめた。

s i d e ・エヴァンジェリン

ライの国に到着した。

国に入ると、ライは国民に歓迎されていた。

どうやら相当慕われているらしい。

そういえば思い出したが、ライラル・フォン・ブリタニアという王の名を聞いたことがあった。

わずか12歳にして王位を得て、国をまとめ戦ではその頭角を示していたらしい。

他の国からは銀王、狂王などほかにも様々な通り名があるようだったが、

この国の住人にとっては英雄と言っても過言ではない存在のようだった。

ライの父、前王の圧政がよほどひどかったことや、戦で負けがないことなどが関係しているようだ。

城に入り、ライは遠征の間に溜まった書類を片付けるために執務室へと向かった。

そこに私も連れて行かれた。

「さて、エヴァンジェリン、こうして城に連れて来はしたが。

とりあえず話をしようか。お前はこれからどうしたい？」

「ふん、無理やり連れてきたやつとは思えない口ぶりだな。王様？」

私が皮肉をこめてそう言うと、ライは笑いながら答えた。

「無理やり？ 違うな。間違っているぞ。エヴァンジェリン。

手を取ったのはお前だろう？」

その言葉にわたしはくつと喉を詰めた。

たしかに、その通りだった。

「そうだな…お前がどうしても嫌だところから出たいなら考えてやらないでもないが、

私は幾分お前を気に入っているんだ。できればこの城で仕えてほしいと思っている。」

「仕えて？私がか？嫌に決まっているだろうそんなもの。」

「まあそう言うな。仕えると言ってもこれは他の家臣たちへの大義名分だ。」

そうだな。実際は好きに過ごしてもらって構わない。

ただし条件としては、サクラ…私の妹なんだが、その子の話し相手にでもなってやってほしい。

年も近そうだ。きっとサクラもお前を気に入るだろう。それさえしてくればお前の生活は保障しよう。」

なんだその条件は……意味がわからない。

会って間もないというのにその条件はいくらなんでも一国の王の考えとは思えない。

「いくら私が子供だからと言って、その話は無防備すぎじゃないか

「？」

「それでも私は何度も裏切ったり人を陥れたりする者たちの顔を見
てきたんだ。

人を見る目は養ってきたつもりだ。私の目は間違っていないと思
うんだが……

そうだな……裏切るつもりがあるのか？エヴァンジェリン」

「……ふん。別に私は政治などには興味はないさ」

その言い方はずるいと思った。今までこのように信頼されたことな
どない。

だが、悪い気はしなかった。この信頼を裏切れることは私にはできな
いだろう。

絶対に本人に言うことはないが。

「わかったよ、その条件にのってやる。

私としても一ヶ所に留まれるのはありがたい。

ただし私にも条件がある」

「聞こう」

「私の存在を大っぴらにしないこと」

「ほう？元より公表するつもりはないが、理由を聞いてもいいか？」

「私の名が世間に広まればきっとこの国は困ることになる。」

「……そうか。わかった。」

「……何故か聞かないのか？」

「聞けば答えるのか？」

「……質問に質問で答えるのは感心しないな。」

「ならば、聞こうか。」

「ふん。教えてやらん。」

と私はそっぽを向いた。

「なんだそれは……」

この全てを見透かしたような王から一本とれたことが可笑しくて

私は自然と笑みを浮かべていた。

ライは私を見てなぜだか一瞬驚いた顔をして何かを呟いていた。

そしてその後ライも私と同じように笑っていた。

この男ならいつか私が吸血鬼だと言ってもいいかもしれないな。

全てを受け入れてもらえるような気がする。

私は吸血鬼になって初めて手に入れた日だまりに心地よさを感じていた。

銀王と吸血鬼2（前書き）

データが消えてしまったため、書き直しました。SIDE方式でもない上にデータが無かったなので前とだいぶ違うかと…
おおまかなところは変わっていないと思います…

銀王と吸血鬼2

私、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルが城に仕えるようになった2年が経った。

まあ仕えると言っても形式だけで、私は普通に過ごしているだけだ。

私を拾った男、ライは出会った当時は非常に大人びていたとはいえまだ少年と言える容姿のような容姿をしていたが、今ではもう16歳になり、随分と大きくなったように思う。
王としての威厳も増してきたようだ。

そして私は未だ自分の正体をライに明かすことができていない。正直明かす必要はないのかもしれない。だが2年たった今そろそろ潮時だろうと思う。

そう、私は吸血鬼。不老不死の吸血鬼だ。不老、それは成長しないということ。

私の身体の間は200年前から止まったまま…10歳の少女のままなのだ。

2年も経つと、私より小さかったライの妹も今では私よりも大きくなってしまっていた。使用人たちも一向に成長する様子を見せない私を訝しんで見てくるものが出ている。

この分ではライも不審に思っていることは間違い無いだろうと憂鬱な気分になった。

幸いといふべきか、まだこのことを聞かれてはいない。もちろん聞かれたら答えるつもりではいる。だが私の中の何かが言つべきではないと騒いでいるのだ。

これは一体なんなのだろうか。

自分の中のよくわからない感情に思考を奪われていると、突然背後から声をかけられた。

「エヴァンジェリン。少し、聞きたいことがあるのだが」

声をかけてきたのは、今現在私を悩ませている張本人、ライラル・フォン・ブリタニアその人だった。

「……なんだ、ライか。なんの用だ？」

私は努めて平静を装い答える。なぜだかわからないがライがこれから聞いてくるであろう言葉を予測し緊張をしている自分がいる。

「ああ、お前の体のことで聞いておきたいことがある。」

「そのことか…そろそろ聞いてくることだと思っていたよ。だが、人目のある所では言えるよう話じゃない」

「…そうか。では今夜私の部屋へ来てくれ。見張り番の者には話を通しておく。そこでなら誰にも聞かれる心配はないだろう。だが、言いたくないのなら別に無理に言う必要はないのだぞ？」

「いや…大丈夫だ。伝えねばならないとは思っていたんだ。…今夜お前の部屋に向かわせてもらう」

「…わかった。本当にいいのだな？」

「くどいぞ。いいと言っているだろう」

「…では、待っている。また会おう」

そう言いライは公務に戻って行った。

ついにこの時が来たのか。自分の正体をライに告げる時が。

これを知った時、ライは一体どうするのだろうか。私を畏怖しいつかの人間がそうしたように私を迫害するのだろうか。

想像したくはないが、考えてしまつ、ライが私にそのような制裁をくだすところを。

その瞬間私の胸に鋭い痛みが走つたような気がした。膝がガクガクと笑い、周囲の気温が下がり一気に寒くなったような気がした。

やつとの思いで私は自室へ戻り、部屋に入ったと同時についに膝をついてしまった。そして私は自分自身を抱きしめる。

寒くて寒くて堪らなかった。この感覚はなんだ？はるか昔に経験したことのあるこの感覚…

そうだ、これは『恐怖』だ。私は怖かったのだライに恐れられ、嫌われることが。

吸血鬼となって始めて手に入れた日溜まりを失ってしまうかもしれないということが。

ライに捨てられる？そんな考えが頭をよぎる。もしもそうならしまった場合、私は一体どうなるだろう。

生きる気力も失うかもしれない。

夜が来るまででの間、私は自室でいいやらぬ恐怖と寒さを静めようと、自分自身の身体を抱きしめ続けた。

夜が来た。

そろそろライの部屋に向かわねばならない頃合いだろう。

私は覚束ない足取りでのろのろとライの部屋へ向かった。言っていた通り、今日は見張りのものはいない。

私はドアをノックし返事を待った。

いつもなら返事も待たずに、むしろ我が物顔で入っているようなものだったが、今は数秒でも時間を稼ぎたかった。全く、世界を脅かす不死の吸血鬼とは思えない有り様だ。

「エヴァンジェリンか？入れ」

ライが返事をし、私は部屋へと入った。

「めずらしいな。いつもは勝手に部屋に入っている位だと言っのに」

「…ちよっとした気まぐれだ。今日は招かれたからな」

「ふむ、そうか。まあいい、そうだな紅茶でも飲むか？」

ライは自分で紅茶を淹れるのが好きだった。メイドにやらせれば良いものを、自室では自分で淹れて楽しんでいる。

「いや、いい。そんな気分じゃない」

「そうか……まあ座れ。それから本題に入らせてもらおう」

ライに促され私は椅子に座る。ライも私の向かいに座った。

「まず、もう一度いっておくが、答えたくないのならそれで構わない。」

「ああ、わかっている」

「……じゃあ聞くが、エヴァンジェリン、お前この2年身体が全く成長していないな？これは一体どういうことだ？何かの病気だとか、知っていることはあるか？」

「……知っている。これは病気ではない。これは私が……っ」

真実を告げようとしたとたん身体が小刻みに震えだす。恐い恐いコ

ワイコワイコワイ

「っエヴァンジェリン!？」

様子がおかしくなった私に驚き、ライが私のそばに駆け寄る。

「どうした!？大丈夫か!？」

こんなに焦った顔を初めて見た気がする。

「エヴァンジェリン？震えているのか？」

そっとライが私の頬に触れた。冷たいようで温かい、そんな温もりが伝わってきた。

「ライ……」

その手の温もりを失うのが怖かった。

その蒼い海のような瞳が恐怖に歪むのが怖かった。

その声で化物だと罵声を浴びせられるのが怖かった。

その顔が嫌悪に歪むのが怖かった。

ライがくれたこの日溜まりを失うのが怖かった。

そうだ私はただの臆病者だ。怖くて怖くて、だけど怖がつている自分を認めるのも嫌で、結果2年もライも自分も欺いていた。

ただ、ライに嫌われるのが嫌で、逃げていただけだったのだ。

今は、私を心配そうに見つめるこの蒼い瞳が憎悪に歪んだとしても、それは当然の報いだと受け止めよう。

そして私はライに真実を述べようとした。

しかしその言葉はライに遮られてしまった。

「エヴァンジェリン…お前が何に怯えているのかは知らないが、私はお前を気に入っている。お前を拾った時からお前が何者であっても受け止めようという覚悟はもうできている。何かに追われているのなら、私はそれから全力でお前を守ると誓おう。

お前が何者であっても、私からお前を手放す気はない。それは肝に命じておけ」

ライのその言葉に私は目を見開いた。

「ふ…はは、なんだそれは」

その言葉に、言ってみればたったそれだけの言葉かもしれない。

でもそれは私の心に深く刻み付けられた。

気が付けば身体の震えは治まっていた。

そして私はライに真実を告げた。

「それで、私の正体を知った今、お前は私をどうするつもりだ？私をこの国から追い出すか？」

私はライに問うた。

「…っおのれこの化け物めが！！よくもこの私を謀ってくれたな、即刻この国から出て行ってもらおうか」

睨みつけ、吐き捨てるように言われたその言葉にひゅっと喉から空気が抜けた。

そんな…さっき言ってくれた言葉は嘘だったのか、と失望、諦め、悲しみ、どれともわからない負の感情が私の中に渦巻き、だんだんと視界がぼやけてきた。

「とでも私が言うと思っていたのかエヴァンジェリン。さっきから何を怯えているのかと思っていればまさかこんなことだったとは…見くびらないで欲しいものだ」

「っ、な、に？」

「さっきも言ったが、私はお前が何者であっても関係ない。私はお前がお前、エヴァンジェリンがエヴァンジェリンだったから拾ったのだ。エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル個人を気に入っているのだ。」

たとえお前が人間ではなかつと、そんなものはどうでもいい。まあ、さすがに吸血鬼というのは驚いたがな」

ふ、とライが笑った。

その言葉をきき、綺麗で一見冷たくも見えるその笑顔を見て、いままでずっと振り続ける雨から耐え続けていたダムが決壊したかのようになんわんと泣いてしまった。

ライはそつと私を抱きしめ、私が泣き止むまで頭を撫で続けてくれていた。

「見苦しいところをみせてしまったな」

「構わないさ。元々は演技だったにせよ、私が言いすぎてしまったのが悪かったのだ。すまなかったな。」

「なっ！私がその程度のことではなくはずがないだろうー！！」

「さーて、私がアレを言った瞬間、捨てられた子猫のような顔をしていたぞ。なあキティ」

「誰がキティかー！！」

「キティだろう?」

「そうだが…そうではない!! もついい…」

と私は吸血鬼について詳しく教えることにした。

「そうか、不老不死の吸血鬼とは…流石に驚いたが、ありえない話ではないのだろうな」

「それにしても随分あっさり信じるのだな?」

「まあな。嘘だったのか?」

「いや、嘘は言っていないが…」

随分とすんなり信じるので拍子抜けしてしまった。

「世の中、奇想天外なことなど身近にあったりするものだからな。実際、私も不思議な力を持っている」

エヴァンジェリンが言ったのだから自分も言わなければフェアではないとライも自分の力、ギアスと言うものについて教えてくれた。

それは私も知らない謎の力で妹と母を守るため見てに入れたのだとライは言う。曰く出会ったばかりの頃に一度かけたとか、一回使った相手にはもう使えないとか、そんな力があるのだから吸血鬼くらいいても不思議ではないだろうとか、わりと詳しいところまで教えてくれていたように思う。

私は魔法のことまでは話さなかった。国をおさめる王が魔法について知り、魔法界と関わりを持ってしまうと、ややこしいことになりかねないと思ったのだ。

「それで、本当にどうする気なんだ？」

「どうもしないさ。いつもどおりで構わない。使用人たちにはそうだな…そういう病気だとしてもなんとでも言っておこう。身体のことに変な目で見てくるものがいれば私に言え、私から直接言おう」

「だが…吸血鬼だぞ？お前は頭はキレるがどうも樂觀視し過ぎる部分がありはしないか？吸血鬼というのは人間の血を吸い生きるものだぞ？気がつけば国が滅んでいるとうことだってあり得るとは考えないのか」

「この2年、誰かが襲われたなどという話は聞いたことがない。もし本気で滅ぼす気ならば、正体を明かさずともそのまま滅ぼすことができたはずだろう。それこそ私の知らぬ間に。それとも、お前は私の国を滅ぼしたいのか？」

「……そんな訳はないが、お前があまりにも吸血鬼というものを甘く見ているような気がしてだな」

「ふふ、お前は私に追い出されたいのか？ そうだな、まあ私はお前を信頼しているからな。だが、そういえば実際お前は血を吸っていたのか？」

「いや、吸っていない。私は特別な吸血鬼だからな、別に血を吸わなくても困らん。」

「それは…吸血鬼とっていいものなのか？ 血を吸うから吸血鬼なのではないのか？」

「たしかに、血を吸わねば力は衰えていくが、襲われる心配のない今、それほど重要なことではないさ」

「ふむ、そろそろ腹が減って限界だというのなら私の血を吸わせてやろうかと思っていたが、心配無いようだな」

「なに？」

「どうかしたか？」

「今血を吸わせると言ったか？」

「言ったが？それがどうかしたか？腹が空いたと国民の血を吸われ
てはたまらんからな」

はははとライが冗談めかして言う。

「いや、その、吸わせてくれるというならありがたい…のだが」

この2年全く血を吸っていない。普通の食事としてもエネルギーは
補給できるが言ってしまうえばそれだけだ。吸血鬼として無性に血を
飲みたくなる時だってある。魔力も底をついているに等しい。

「ほう、死なない程度なら別に構わない、まあお前が私を殺す気で
来るとはどうも考えられんがな。それにまず吸血鬼というものに興
味もある」

さあ、どこからでもかかってこいと言っても言つかのようにライは椅子
に座り両腕を広げた。

これがカリスマというものの、こんな時でも王様オーラが半端無い
と思ったことはそつと心にしまい、私はおそろおそろライに近づい
た。

さて、どうするか、別に腕からでも吸えるのだが、ここは吸血鬼ら
しく首筋からいただくこととした。

そしてライの首元を血が吸いやすいように開き、そつと牙を立てた。

「っ」

痛かったのかくすぐったかったのか、ライがわずかに身じろいぐ。

私も2年ぶりで、しかもそれがライの血だということもあり期待と
興奮が隠せなかった。

美味い。ライの血はこれまで飲んだことのないほどの美味しさだった
普通の血をまるで数10年、数100年寝かせたワインのような美
味しさだ。しかし、だからといって、吸血をやめないわけにはいか
ない。

わたしは最後の一滴まで逃してたまるかというように、牙を突き立てた傷口を舐め上げた。すると傷は一瞬で消えてしまう。

「っ傷が…ない。すごいなこれは…でも少しくらくらする」

「すまない、あまりにも美味かったからついつい飲み過ぎてしまったようだ。」

「血が美味いと言われても、なんともしっくりこないな、普通と違うのか？」

「全く違う。王族というだけでも相当なものだが、それにかなり珍しいハーフという要因が加わってより一層だ」

言う訳にはいかないが、なぜか魔力の量も相当だった。

「そういうもののなか、まあ腹が減ったらまた来い。体調が良ければ吸わせてやる」

「……ありがとう」

「構わない。だが、今日は少し疲れた、もう休むことにする」

おやすみ、とライはベッドに入った。

公務の時には一切隙を見せないこの男が、無防備にベッドに入り眠ろうとしている姿を見て私は頬が緩んだ。信頼されているのだという気持ちが伝わってきて嬉しかった。

そして私もライのベッドに入り込んでやった。正直私は夜は眠る必要はないのだが、この際どうでもいい。

「うわ、なんだエヴァンジェリン」

「ふふふ、今日くらいいいだろう」

「…構わないが」

「おやすみ、ライ」

「…おやすみ、キティ」

この日は生まれて初めて温かい夜を過ごした。そしてこんな日常がずっと続けばいいと、そう思った。

その後吸血した日は一緒に寝るという習慣がついたのは言うまでもないだろう。

銀王と吸血鬼2（後書き）

おおまかなところは変わって…ないです…よね？

かなり不安ですが、もうこれを2話とするしか…汗

1、2、3話と読んでいって書き方が違うのは多めに見えていただけると幸いです。

ご感想、評価等ありましたらよろしく願います。

銀王と吸血鬼3

side・エヴァンジェリン

私が吸血鬼とライに正体を明かしてから1年が経った。

この1年でこの国を侵略しようとする輩が増えてきた。ライ自身は他国を侵略する気は全くないそうなのだが他国はそういうわけではないらしい。

この地を手に入れ、自分たちの領土を拡大したいようだ。

こちらは何もする気はないにも関わらず、容赦なく襲ってくる蛮族たちにライは神経をすり減らしている。

もちろん態度にはつきりと出しているわけではないが、時折疲れた顔をしているのだ。

こちらは何もする気はないのに襲われてしまうという点は、3年前までの自分を見ているようで実に歯がゆい。

さらにこちらは私のときとは違い、

戦には勝っていても、それでもどうしても被害は出てしまうのだ。最近もライに近い騎士がライを守るために命を落とすということ

があつた。

ライは戦略指示も出しつつ、前衛で戦う王だった。そのため騎士からも慕われている。

ライは王として国民や、臣下、騎士や兵の前では毅然と振舞っていたが、それでもやはり相当こたえているようだった。

なぜならライは私に一回だけぱつりと言ったことがある。

「あの時私が討ち取られていれば、この長い戦も終わり、これ以上被害を受けることも無くなっていたのだろうか……」

私は慌てて叫んだ。

「何を言っている！？あんな見境なく国を襲ってくるような蛮族に国を乗っ取られてでもみる。」

どうなるかなんて目に見えているだろう！？

それに……お前が死んだら……っ」

「ああ……すまない。ちょっと今日は夢見が悪くてな。感傷的になつてしまったようだ。」

もちろんわかっているさ。私は妹と母上を置いて死ぬわけにはいかない。」

「…わかっているならいい。もう一度そんなことを言ってみろ。」

張り倒してやる。」

いいとは言ったが妹と母親のためだけというのが少し…不満だった。

そのために王になったのだということはわかってはいるが

もう少し何かあってもいいんじゃないかと思う。

何がと言わないが。

ライは笑いながら

「それは怖いな。張り倒されないためにももう弱音は吐かないこと
としよう。」

といい仕事に精を出していた。

あいつは本当に大丈夫なんだろうか。

最近は顔色も悪いみたいだ。

どうしてだろうか。

ライの調子が悪そうだと気になって仕方がない。

それにしても今度死ねばよかったなどと言ったら張り倒すだけでは済まらず、

無理やりにも吸血鬼にして死なないようにしてやるのか……。

ん？ちょっといい考えかもしれない。

s i d e ・ ライ

最近北の国家の攻撃がやむことがない。砲弾の音が耳から消えることがなく。落ち着ける日がないと言っても過言ではない。

私は侵略する意思がないことを伝えているのだが、彼らにはそのようなことは関係ないらしい。

終わることのない戦に、兵士や騎士たちも疲れているのが目に見える。

このままではまずいとわかっているのだが、こちらに侵略する意思がない以上、

彼らの攻撃を受け流すくらいしか対応できる手段がない。

近しい騎士が命を落としたときに一度だけエヴァンジェリンに弱音を吐いてしまったことがあったが、

そんなものは一蹴されてしまった。

そうだ、わかっている。私はまだ死ぬわけにはいかない。

母上と妹が生きている限り、私は二人を守らなければならないのだ。

いや二人だけではなかったな。エヴァンジェリンや、私を慕ってくれている騎士や国民たちのためにも私は闘わなければならないのだ。

私は王だ。たとえ戦の終わりが見えなくとも、兵が最後の一人になるうとも、

私はそれを守り、戦わなくてはならないのだ。

それが私を守るために命を落とした騎士や兵士たちへの責任であり義務でもある。

頭では理解していても、思うようにできないのが人間というものか。
最近は何でまで蛮族たちが襲ってくるようになっていた。

しかもその夢の内容は最悪で、次々と私の目の前で、私の大切な人が消えていくのだ。

やめろ、やめてくれ。なぜ襲ってくるのだ。私は何もしていないではないか。お前たちと戦う気はない。

頼むから私の大切な者たちを奪わないでくれ！

サクラ！母上！エヴァンジェリン！！

そして皆消えていく

いつもいつもこの悪夢で目が覚めてしまう。おかげでろくに眠れたものではない。

今も眠って一時間経っていないかというくらいで思わず飛び起きてしまった。

この夢を見た後は眠ることもできず、いつも作戦を練ったり、本を読んだりして過ごしている。

またこの夢かと辺りを見回すと、そこにはエヴァンジェリンがいた。
一応見張りの兵はいるはずなのだが、いつも気がつくところにいる
ことがある。

吸血鬼にはそんなもの通用しないというわけか……

一体どんな手を使っているのだか。

それよりも今ここにいるということは……

参った。

「どうした？エヴァンジェリン。また血を飲みに来たのか？」

「そのつもりで来たんだが、やっぱりやめておく。」

「……そうか。」

そしてしばらく沈黙が続いた。

「おい。」

先に声をかけたのはエヴァンジェリンだった。

「ライ、お前、最近眠れているのか？随分とうなされていたぞ。」

「……やはり見られていたのか。そうだな。眠れていると言えば嘘になるか。」

「ライ……お前……。」

「心配するな。大丈夫だ。仕事ができるくらいには眠れている。」

「だが……顔色が悪いぞ？」

「大丈夫だ。」

「……………」

「……………」

困った。こうなるとエヴァンジェリンは諦めない。

少なくとも納得できる答えを返さなければ動くことがない。

「……あまり、大丈夫ではない。」

「……………」

「……大丈夫ではない。」

「ようやく言っただな。」

「これは言わせたという。」

「どちらでも同じだろう。」

「どう考えても違うと思うんだが…。」

「ええい！うるさい！！細かいことはいい！

今問題にするべきことは、お前が大丈夫でないということだ！！」

「大丈夫だと言っているだろう？」

「嘘をつくな。そんな顔で言われても説得力など無いっ！！」

「そんなにひどいか？」

「ああ、ひどいな。見ていだけでこちらが倒れてしまいそうなのにな。」

「何を馬鹿な……。」

「ごまかすな。話せ。なにを苦しんでいる？」

諦めてくれる気はないようだ。仕方がない。正直に言っとしようか……。

「夢を……見るのだ。皆が蛮族に殺される夢だ。」

おかげでここ数カ月、ろくに眠れたものではない。

どんどん、どんどんなくなっていく。エヴァンジェリン、お前もだ。

私は見ているだけでどうすることもできないのだ。そして最後に私だけが残るんだ。

いつもそこで目が覚める。」

「そんなもの、ただの夢だ。」

「わかっていて。だが、この目が覚めた後にも続くこの恐怖は本物なのだ。」

まだ皆生きている。だがあれはいつか起こり得る未来かもしれない。

こんな日が来るような気がして、お前たちを失うことがたまらなく怖いのだ！」

いつのまにか私の体はふるえていた。

心の底から湧いてくる恐怖が寒さに変わったかのように私はふるえていたのだ。

言葉にただでこんなにも恐ろしくなるとは思わなかった。

情けない。一国の王ともあろうものが。

寒い、凍ってしまいそうだ。

s i d e ・エヴァンジェリン

目の前で身体を縮めてふるえているライを目の前にして、私は内心驚いていた。

いつも冷静で毅然とし弱さを見せないこの王が

今、ベッドの上で独りが怖いとふるえているのだ。

まるで昔の私のように

私はそんなライを見るのがとても辛くて

しかしそれと同時に

無性に愛おしいと感じていた。

王として民をまとめる姿も、

戦のときにも冷静に状況を判断し、

的確な指示を与え戦う姿も、

不敵な笑みも、

無自覚な優しさも、

時折みせる天然な行動も

家族にだけ見せる微笑みも、

そして今こうして初めて見せた弱さも、

そのすべてが愛おしい。

今気がついた。

きつとこいつに拾われた時から

私はライに惹かれていたのだと思う。

ライが愛おしくてたまらない。

ははっ、なんだ、私はライを愛していたのか。

だからこいつのちょっとした顔でも気になって仕方がなかったのだ。

そして私は目の前で子供のようにふるえているライを

強く抱きしめた。

「心配するな。それはただの夢だ。そんなことが起こるわけがない。
なぜならまずありえないことが起こっているぞ。

私が消える訳がないだろう？ 吸血鬼だぞ？ 真祖の吸血鬼にして不老
不死の

このエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルが、消えるわけがない。

私は一生お前とともに生きると誓おう。いまさら離れると言われても離れる気などないからな。

先にそう言ったのはお前だ。覚悟しろ。」

と私は不敵な笑みを浮かべた。

気がつけば、ライのふるえは治まっていた。

「っは、これでは1年前とは立場が逆だな。

ありがとう、エヴァンジェリン

」

恐怖は無くなったが、

蛮族の攻撃はさらに激しさを増し、昼夜問わず戦が続いていた。

ここ半年、夢を見ることはなくなったが、今度は夢を見る間もない。

蛮族は四方八方から攻め込んできて、日に日に兵士の数も減りこれ以上減ってしまえば勝ち目はなくなってしまうそうだ。

激しくなる戦に比例して使うギアスの回数も増えてきている。

やはり防戦だけでは限界があった。

侵略するしないの騒ぎではない。このままではこちらは負けてしま
う。

もう限界だ。あんな国、滅びてしまえばいい……。

次はこちらから攻め込んでやろう。

そして今日は演説の日だ。政策を変える以上国民への演説は必要だ。

「我が民たちよ！！聞け！！」

そして演説を始めた。

演説を始めて数十分が経過したとき、突然鐘の音が響いた。

この鐘は敵襲の合図だ。しまった、こんなときに。

どうすれば……

どうすれば……

考えを巡らせていると騎士の隊長に声をかけられた。

「陛下！！どういたしますか！？」

このままでは国民への被害がとんでもないことになってしまふ！！
しかしここは演説台の上だ。国民に慌てているさまなど見せるわけにはいかない！

国民の不安を煽らないためにもこちらに勢いがあることを見せつけねば……

「愚かな北の国家が我が領土を汚している！！」

やつらを

皆殺しにしろ……」

side・エヴァンジェリン

なんだ！？

今のは！？

ライが叫んだ瞬間巨大な魔力を感じた。

何が起こった！？

「皆殺し……」

「奴らを皆殺しに……」

国民、騎士、使用人、この国のすべての人間が口々に呟き武器をとって国の外の蛮族の元へと走っていく。

何だこれは？

異常だ。何が起こっている。

そう思っていると、国民たちはたちは私に襲いかかってきた。

とっさのことで驚いたが、魔法で気絶させておいた。

そうだ、ライは!?

あわててライの元へと駆け出した。

「ライ!!」

「やめろ!!今は違う!!」

行くんじゃない!!」

ライは必死に暴走する彼らを止めようとしている。

「ライ!!—一体何をした!?!」

「エヴァンジェリンか!!無事だったのだな!

これは…おそらく…ギアスの暴走だろう!!

奴らを皆殺しにしろというギアスが……

かかってしまったのだ!!」

「暴走だと!? そんなことがあるのか!?」

「わからない!! だがっ……」

そっだ、母上とサクラはどうなっている!？」

ライが叫んだ。こんなに取り乱したライは初めて見る。

「エヴァンジェリン、お前はここから逃げろ。この国は、もう……」

「

何を言っている!？ お前も一緒に逃げろ!」

「私は母上と妹を探さなければならない。」

「それなら私も手伝う!!」

「これは私が起こした問題だ。」

私に片付けさせてくれ……。」

「っだが!!」

「お願いだ。私が言った愚かな一言で起こった争いに

お前まで巻き込むのは嫌なのだ。

わかってくれ。」

わかるわけがないだろう!!

だがライは本当に辛そうな顔をしていた。

そんな顔をするな……。

わかったよ……。

「……1時間だ。それだけ待つ。何もしない。

だが1時間経ったら必ずお前を引きずってでも一緒にここから逃げるからな。」

「お前は本当に、厳しいな。

ありがとう。」

「絶対に、死ぬんじゃないぞ。

お前が死にそうになったら、私の眷属にしてやるからな。」

「ふっ！遠慮する。」

そしてライは外に飛び出ていった。

どこが厳しいと言っんだ。全く。

甘すぎるくらいだ。

本当は今すぐにでも引きずってでも逃げたかった。

ライが守ろうとしていた人々が、我を失って蛮族へと襲いかかるさま。

そして崩れ落ちるさま。

そんな様子を私の方がライに見せたくなかった。

「ライ……死んだりしたら私は絶対に許さないぞ。」

しかし、たったの1時間、されど1時間

この1時間は私にとって地獄のような時間だった。

s i d e ・ ライ

国中がギアスにかかったということは

私の母上も妹も、例外なくギアスにかかってしまったということだ。

早く見つけなければ、

だがしかし、どうすれば？ギアス取り消すことなどではしない。

できないとはわかっていても私は二人を探さずにはいられなかった。

どこだ？どこに行った？

私はあちらこちらで戦闘が起こっている中がむしゃらに走っていた。

外は蛮族や国民、城の兵士、使用人で溢れていた。

蛮族は国民まで襲ってきたことに困惑していたが、敵には変わりないため容赦なく斬りつけていた。

なんということだ……

私があんなことを言ってしまったために……

私の愚かな一言が、このような結果を生んでしまったのだ……

そんな中に見知った人影を見つけた。

母上と妹だ。数百メートル離れたところで、蛮族達に向かって走っている二人を見つけたのだ。

「やめろおおおおおおおおおおおおつ！！！！！」

私は即座に駆け出したが、間に合うはずもなく、目の前で母上と妹が切り捨てられる様子を走りながら見ていることしかできなかった。

それはまるでスローモーションのように見えた。二人の腹を、胸を、腕を、刃が襲う。

そして二人は崩れ落ちた

その瞬間、私の世界から色が消えた

足に力が入らない。私はそのまま地面に崩れ落ちた。

[illegible]

私は、何のために、この力をつ、ギアスを手に入れたのだ。

[illegible]

side・エヴァンジェリン

約束の時間だ、急いでライを探さなければ！！

魔法の秘匿などどうでもいい！！空からライを探すことにした。

嫌な予感がする。

魔法使いの勘ってやつは、当たるから嫌になる！！

たのむ、生きていてくれ！！

そして私が見つけたのは戦場の真ん中で倒れているライと、その周りを囲む蛮族の姿だった。

猛スピードでライの元に飛んでいく。蛮族へと無詠唱魔法を放ったがもはやそれとスピードは変わらない。

全力でライの元へ飛んで行った。

「ライ！！」

蛮族を無視してライの元へと駆け寄る。ライの周りにはライの血の海ができていた。

「ライ！！目を開ける！！」

私を独りにするな！！約束を忘れたのか！？

おい！！ライ！！」

まだかろうじて息はあったがライの顔は青白く、目を覚ます気配がない。

血を流しすぎている！！このままでは！！

どうする！？一か八か、私の眷属にしてやろうか！！

後でライになんとわれようと、先に約束を破ったこいつが悪いのだ。

そう考えを巡らせていると蛮族が襲いかかってきた。

銀の刃が私を切り裂いた、

邪魔をするな。

このままでは何もできないっ。

そうだこいつらがライをこんな目に……

切られても平然と立っている私を見て、蛮族共は恐れ慄いた。

こいつらなどに……ライがつ

「
よくもつ。」

その瞬間私の理性ははじけ飛んだ。

気がつくと辺り一面血の海だった。もはやそれがヒトであったのか
もわからない。

自分の手を見ると赤黒い血に染まっていた。

私がつったのか。

はっとしてライを見た。

さっきよりも虫の息だ。

あわててライの元に駆け寄った。

「ライツ！目を覚ませ！ライツ」

「っ…エ…ヴァ…」？

「っライー！！死ぬんじゃないぞ！！」

苦手だったために回復魔法を覚えていなかったことがたまらなく悔しい。

ライが私の頬に手を伸ばしてきた。

私は慌ててその手をつかむ。

「な…く…な…」

す…な…い…ひと…りに…さ…せて…まっ

ライからどんどん血の気が引いていく。

「あやまるな！！あやまるくらいなら生きる！！お願いだ！！」

私を独りにする気か！？今からお前の血を吸わせてもらっぞ！！

私の眷属になれ！！文句は生き残ってから聞く！！」

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ

ライがいなくなるなんて！！

やっと見つけたんだ！安心できる居場所を！！

「わ……しは……も……いい……だ……じょうぶ……エ……ヴァ……な……ら……
す……ぐに……」

「大丈夫なわけがないだろう！？お前が死んだら！！私は！！私は
！！」

また独りぼっちになってしまっじゃないかつ。

この嘔吐きめっ

「し……わせに……な……て……れ」

ライの首筋に牙を立てようとしたその瞬間。

ライは力尽きた。

間に合わなかった。

「っあ……あ……あ、うあああああああああああああ
」

そこから何をしたのか覚えていない。

ずっと泣いていたような気もするし、我を忘れて残った蛮族共を全て片付けたような気もする。

あるいは両方か。

気がつけば、私は行くあてもなく、ライの元から去っていたのだっ
た。

「ライ……大嘘吐きの名の男……」

私は一生忘れないから……。」「

s i d e . ? ? ?

「 おやすみ。」

銀の王よ。

お前には契約を果たしてもらわねばならないのだ。

ここで死なれるわけにはいかない。

今は眠れ 全てを忘れて

再び目覚める時が来る、その日まで。

「

おやすみ。

」

銀王と麻帆良1

side・ライ

「逃げなければ……っ」

僕は無我夢中で走り続けていた。

そして気がつくと目の前には大きな建物があった。

そう言えば途中、門を通ったような気がする。どこかの敷地内に入ってしまったようだ。

そうだ、追手は？と辺りを見まわしたが誰もいない。

さすがにもう追いかけては来ていないらしい。

「それにしても……ここは……どこだ……。」

辺りを見回しながら考えていると、誰かが近づいてくる気配がした

僕はとっさに草陰に身を隠した。

s i d e ・タカミチ・T・高畑

「さて、侵入者はこのあたりに来たと思うんだけど。」

僕は先ほど門から何者かが侵入したとの報告を受けてきた。

門から侵入したということは、もしかすると魔法関係者ではないかもしれない。だが、ただの不審者だったとしても

もちろん看過することはできない。

いずれにせよ、とにかく見つけて捕まえるべきだろう。

「うつ………！」

近くの草陰からつめき声が聞こえた。

近くに駆け寄ると、そこには、拘束衣というのだろうか？そんな服

を来て倒れている銀髪の少年が倒れていた。

おそらく、高校生ほどの年齢だろう。彼はどういっわけか気を失い今は動く気配がない。

何か不思議な感じはするが、魔力というものは感じなかった。

（仕方がないな……話は彼が目覚ましてから聞くとしようか……。
）

とりあえず僕はこのことを学園長に報告し、少年を担いで近くの医務室、麻帆良学園女子中等学園の医務室に運ぶことにした。

s i d e ・ ライ

「っ……」

目が覚めると僕はベッドに横になっていた。

さつきは突然頭痛に襲われあまりの痛みに意識を失ってしまったのだ。

ぼやけていた視界がはつきりしてくると、近くに女性と男性がいるのが見えた。

「……………ここは？」

「目が覚めたのね？ここは麻帆良学園女子中等部の医務室よ。」

髪の高い眼鏡をかけた女性が答えた。

「麻帆…良学園……………？学校なのか…ここは……………」

「ああそうだよ。」

今度は眼鏡をかけた中年らしき男が話しかけてきた。

「ああ、源先生、ちょっと席をはずしてもらっても？」

「はいはい、わかりましたわ。」

男は女性に席をはずしてもらい、僕に話しかけてきた。

「君が校舎の近くで近くで倒れていたのを連れてきたんだけど、

君はどうしてあんなところにいたんだい？それから、

まず名前を教えて欲しいんだけど……。」

「……名前……。」

僕の名前はライ……です。」

「ライ君か。僕の名前はタカミチ・Ｔ・高畑。この学園の広域指導員をやっている教師なんだ。」

好きなように呼んでくれて構わないよ。

それで、君はどうしてあんなところにいたんだい？それにその服、拘束衣ってやつだと思っただけど、

どうしてそんなものを？」

「……わからない。気がついたら、逃げていたんです。ここへ来て、突然頭が痛くなって……」

目が覚めたらここに……。」

「わからない？」

「……はい。」

「まさか、記憶喪失ということかな？」

誰から逃げていたのかもわからない。」

わかるのは名前と知識だけ。他のことは全く思い出せない。

覚えているのはギアスという不思議な力のことだけだ。

そんなことは言うわけにはいかないが。

「わからない……。名前と生活に必要な知識以外は何もわからないんです。」

「そうかい……。困ったな。本当に記憶喪失ってやつみたいだね。

ちょっと待っていてくれ。学園長に相談してみるよ。」

タカミチさんはそう言うときケータイを取り出し、学園長とやらと電話を始めた。

僕のような得体のしれない人間がこんなところにいるのはまずいだろう。

僕がすぐに出ていけば済む話だ。

そう思い僕は起き上がろうとした。

「ええ！？学園長！！本気ですか！？」

突然タカミチさんが叫んだ。

「はい、はい、そうみた

なんだ？

何を話しているんだろうか、タカミチさんは相当驚いているようだ。

そしてタカミチさんは電話を終え、僕に話しかけてきた。

「ライ君。君はこれからどこに行くあてはあるのかい？」

「……いえ、ありませんけど……。」

「なら、どうだろう？記憶が戻るまでこの学園にいるというのは？」

だが、何を言っているんだこの人は……

「こういうのは普通警察とかに持っていくのが筋なんじゃないのか？」

「いえ、僕みたいな得体のしれない人間がこんな学校にいるべきでないのは、

記憶がなくなっただけでわかりますよ。

何を言っているんですか？」

そういうとタカミチさんが困ったように笑いながら答えた。

「僕もそう思うんだけどね、学園長がさっきの質問に君がそう答えるような人物なら」

この学校で預かってみようじゃないかと言いだしてね。どうやら君は学園長のお眼鏡にかなったようだよ。

見たところ、誰かに追われていたようだし。その服を見ても、よほど特殊なところから来たんだろう？

このまま君を放りだすのも危ないだろうしね。」

「……僕が危ない側の人間だとは考えないんですか？」

「ははっ、困ったことに、学園長の勘はよく当たるんだよ。」

そんな……勘なんかで決めていいことなのだろうか？これは…

「でも……。」

「大丈夫だよ。もし君が本当に危険人物なら、その時は僕が相手をする。」

「相手？」

「うん。君が危険人物だとわかったら、容赦はしないよ。」

「何かあってから危険人物だとわかったらどうする気なんですか。それから止めても遅いですよ。」

「そうだね。とりあえずそういう話は明日、学園長室でしょう。」

君も調子が悪そうだな。今日は眠るといい。」

「だから、その間に何かあったらどうするんですか。」

「そこまでして君は自分を危険人物だと思って欲しいのかい？」

「…そういうわけじゃありませんけど……。」

「ははっ、うん、僕も学園長のように君が悪いことをするようには思えなくなってきたな。」

それでも、僕も勘はいい方なんだよ。

とにかく今は休んでくれ。

おやすみ。また明日迎えに来るから。」

そう言っただけでタカミチさんは医務室から出て行った。

何を考えているんだ…この学園の偉い人は……

そんなことを考えながら僕の意識は眠りの淵へと落ちていった。

翌朝、目が覚めると医務室にノックの音が響いた。

「はい。」

返事をする、タカミチさんが入ってきた。

「おはよう、ライ君。よく眠れたかい？」

「はい、おかげさまで。体調も随分良くなりました。」

「それはよかった。じゃあ、今日は学園長室に行こうと思うんだけど、その服じゃあちよつと出歩けない。」

僕ので悪いんだけど、とりあえずこれを着てくれないかい。」

そう言つてタカミチさんは僕にスーツを一式を渡してきた。黒を基調としたごく普通のスーツだ。

「ありがとうございます。」

礼を言つて僕は服を着替えることにした。

着替える時、タカミチさんに僕の身体をまじまじと見られた。

「……なにか？」

「ああ、いや、すごくいい筋肉の付き方をしているなと思ってね。

まるで歴戦の戦士のような体つきだと思ってね。いや、歴戦の戦士にもそうこんな体つきをしている者はいないだろうな。」

「そう…なんですか？」

「ああ、ぜひとも手合わせ願いたいよ。」

「…その時はお手柔らかにお願いします。」

そう言えば戦闘に関する知識もあるようだ。あらゆる武術や武器の使い方まで。

それにしてもタカミチさんは歴戦の戦士の身体を見るような機会でもあるのだろうか？

それに、それが本当だとしたら、一体昔の自分は何者だったんだろう。

しかし、やはり思いだそうとしても、頭に霧がかかったかのように何も思い出せなかった。

そして学園長室へと向かうため、校舎内を歩いていたが、生徒は見かけない。

今日は休みなんだろうか。

「タカミチさん。そう言えば、今は何曜日なんですか？生徒を一人も見かけませんけど。」

「ああ、今日は日曜日だよ。」

日曜日か。道理で誰もいないわけだ。

そして僕は学園長室に着いた。

タカミチさんが失礼します、と中へ入った。続けて僕も中に入る。

「学園長。連れてきましたよ。」

「ふおおおお、御苦労じゃったな、高畑先生。」

さて、君がライ君じゃな？わしはこの麻帆良学園の学園長を務めておる近衛近右衛門じゃ。

よろしくな、ライ君。」

中には、学園長。近右衛門と名乗った老人がいた。

まず、頭に目が行ってしまったが、不可抗力だ。

「まず、君の処遇を決めたいと思うのじゃが。」

「処遇、ですか？そんなこと決めていただかなくとも……。」

「ふおおおお、まあ、そう嫌がらずとも。」

そうじゃな、何から話そうかの。

では、ライ君。君のことを調べさせてもらった。

これでもわしにはあちこちにコネがあるんじゃないよ。少なくとも君の失踪届などは出ていないようじゃった。

警察に突き出しても仕方のないことじゃろう。ライという名前だけではさすがに戸籍も調べられんからの。

行くあてもないようじゃし、この学園で過ごすといい。

普通に過ごしているうちに記憶が戻ることもあるじゃろうし、記憶が戻ったらあとは好きなようにしてもらって構わんよ。悪いようにはせんて。」

たしかに行くあてもない。そこまで言ってくれるのなら僕にも断る理由はない。

これ以上ない、ありがたい話である。

「……では、よろしくお願いします。」

「ふおおおお、うむうむ。よろしく、ライ君。

では君の処遇についていくつか案があるのじゃが。

まずひとつ目、見たところ君はまだ高校生ほどのようじゃ。

この学園の高等部にでも編入してもらう。

そこに行くのであれば、残念ながら寮は一杯じゃから学校の近くのクラブハウスに住んでもらいたい。

そこにはちよつと事情のある兄妹が二人住んでおるが、部屋は空いておるし、問題はないじゃろう。」

「事情……？」

「うむ、妹の方がちよつと身体が不自由でな、学校の近くに住ませてるのじゃ。」

それから二つ目、君も自分のことが信じられないようであれば、こちらから見張り兼お世話係でもつけようと思っておる。

その場合、ちょっと法律の方は置いておいて、君を女子中等部の副担任にしたいと思う。

担任は高畑先生じゃしそのクラスの生徒の中には君の見張り兼お世話をするのにちょうどいい者たちがたくさんおる。

住まいはそうじゃな……女子寮、さっき言ったクラブハウス、それから宿主に断られなければ森の方にログハウスがある。

まあ、最後のは確実に断られるじやろうがな。

どうじゃ？

君はどうしたい？」

女子中等部で副担任？

突拍子もない話である。知識は少なくとも大学卒業レベルは入っているようで、知識についての問題はなさそうだが……。

高校生活を過ごすか、副担任をするか。

それに見張りか……、自分でも自分の得体が知れないのだ。確かに誰かに見ていたもらった方がいいかもしれない。

それにしても

「あの、お世話係と言つのは？」

「ああ、君はこの学園について何もわからないじゃろうからな。学校の案内や周辺の案内などを任せたいと思っておる。」

この学園は広いからのお。この学園を見て回るだけでも結構な刺激になるじゃろうて。」

そういうことか。

ありがたいことだ。

なら僕は、

「。」

銀王と麻帆良10月1日

side・ライ

高校生活か副担任。

どちらを選ぶか。どちらも利点はある。

高校生は、本当に普通に過ごしていくという、とてもいい日常を過ごすことができそうだ。

が、副担任の場合、給料も出るそうだ。学生として世話になってばかりでは申し訳ない。

ここは、働ける方を選ぶ方がいいかもしれない。自分の存在もよくわからない今、

それに対応できる人員がいるというのもいいことだろう。

だから僕は

「では、副担任の仕事をしたいと思います。

知識もすでに大学卒業レベルほどはあるみたいですし、

高校で勉強を学ぶ必要もなさそうです。」

「ふおおおお、そうかそれは都合がいいのう。了解したぞい。

すぐにでもそういう手続きを進めるからの、明日には高畑先生のクラスに行ってもらうぞい。

今日はとりあえず生活に必要なものを買うといい。

お金を渡しておくぞい。後で案内役をつけよう。

ところで、ライ君はどこに住みたい？」

住む場所……か、正直眠る場所さえあればどこでもいい。

ただ、女子寮だけはありえないな。

「女子寮以外で、

眠れる場所さえあれば僕はどこでも構いません。」

「ほう？女子寮じゃだめか。残念じゃのう。」

ふおおおお、と学園長はあごひげを撫でながら言った。

残念？意味がわからない。

「残念とは？」

「ふおおおお、いやの、その方がおもしろそうじゃろう？」

僕はその言葉に啞然とした。おもしろさを求めていたのか、この老人は。

「ふむ、ではとりあえず、高等部にあるクラブハウスよりは近いじやろう」

森のログハウスの方に当たってみるかの。

どれ、ちょっと待っておれ、連絡してみるからの。」

「いや僕は」

「

別に遠くても構わないと言おうとしたが、学園長は電話を始めた。

「おう、エヴァンジェリン、わしじゃよわし。

いやいやまてまて切るな切るな！詐欺じゃのうて、近衛近右衛門じやよー！！

ひどいのう……今日はお主に頼みがあるんじやが、聞いてもらえんかの？

うむ、実は昨日、侵入者が入って来たじゃろう？その者に寝床を提供して欲しいのじゃ。

なっ、ちよっ！！

……切られてしもったわい。

ではライ君、クラブハウスの方に住めるようにしておくから今後はそこで生活してくれ。」

「はぁ、わかりました。」

「うむ、ではそろそろ来る頃じゃと思うんじゃが……。」

「来る？」

「とりあえず君に、今日この学園の案内をしてもらおうと思って呼んでおったのじゃ。」

前もって紹介しとかんと、ちよっと面倒になるかもしれん娘じゃ。

良い子なんじゃが、幾分、頭が固くてのう……。」

そう言うつと学園長室にノックの音が響いた。

「どつぞ。」

「失礼します。」

入ってきたのは、おそらくこの学園の制服であろう服を着て、
長い得物袋を背負った、黒髪を片サイドに束ねた少女だった。

side・桜咲刹那

今日の朝、学園長から連絡が来た。

今日はお嬢様の護衛はいいから、9時に学園長室に来るようにな、
ということだった。

そして私は学園長室にやってきた。

「ふおお、よく来たのう、刹那君。今日は君に紹介しておきたい
人物がおつての。」

彼、ライ君じゃ、まだ若いが、君のクラスの副担任を勤めてもらう
ことになった。」

学園長が紹介した先には、高校生ほどの年齢で身長は170cm代後半ほど、

黒いスーツを着た、細身、銀髪、碧眼の妙に気品のある綺麗な男の人が立っていた。

だが表情はなく、能面のような顔をしている。

「副担任……ですか？でも、彼は高校生くらいのように見えるのですが……。」

「ふおお、大丈夫じゃよ、彼はブリタニアの学校で、すでに大学を卒業しておる。」

今は日本の教育状態も学びたいそうでのう。こちらで採用することにしたのじゃよ。」

「はあ、それなら……わかり……ました。」

学園長がそう言うのならそうなのだろう。

「じゃがのう、彼はこちらに来る途中。何かがあったらしくての、

生活に必要な知識と名前以外の記憶を失ってしまったようなんじゃない。

」

「記憶……喪失、ですか……。」

「うむ、それで刹那君、今日は君に彼を案内してもらいたいのじゃ。」

生活に必要なものを買える場所やこの学園についてなどをな。」

私が案内？お嬢様の護衛を置いておいてまで、なぜわざわざ私を？

「私が…ですか？」

「そうじゃ、君にじゃ。実は彼、誰かに追われていたみたいで、その上さらに自分の記憶がないことが、相当不安みたいで。」

自分が危険人物なんじゃないかと。誰かに見張っててもらっていた方が気が楽みたいなんじゃ。」

そついう……ことが。追われていたというのが気になるが。

なんとなく学園長の言わんとしていたことが理解できた気がする。

「そついうことなら、わかりました。」

「頼むぞい。刹那君。他の者たちにも伝えてもらえるとありがたい。」

他の者と言うのは、クラスの魔法関係者のことだろう。やはり私の予想は当たっていたようだ。

「では、ライ先生…ですよね。私は、麻帆良学園女子中等部1
Aの桜咲刹那です。」

「よろしくお願いします。」

「ああ、よろしく。」

「あのそう言えば、失礼ですけどフルネームは？」

「……ライ・シルヴァニアだ。だが、ライでいい。」

「わかりました。では、まず学園を案内しますのでこちらへ。」

そう言い私はライ先生の案内を始めることにした。

side・近衛近右衛門

刹那君とライ君が行った。

ふう、なんとか無事丸めこめられた。

ライ君が魔法関係者ではないかもしれない以上、下手なことは言えんからの。

後で詳しい説明をしておくでしょう。

そう言えばライ君も私が刹那君に言ったことには驚いていたようじゃったが。

すぐにそういうことかと理解していたようじゃった。

彼、相当頭が切れるようじゃ。

「あの、学園長。」

「おおう！？なんじゃタカミチ君！！」

なんじゃ、びつくりした。

タカミチ君、そういえばずっとここにいたのか。

話さんから忘れておったわい。

「……何を驚いているんですか、学園長。」

「べ、べつに忘れてたわけじゃないんじゃないからね!？」

「……忘れてたんですね。」

「む、こほん、で、なんじゃ？」

「いえ、彼の身体のことです少し気になることが。」

ほう、おもしろい。

彼が魔法関係者なら、実に欲しい人材じゃ。

実は魔法使いじゃったりせんかのう……。

side・ライ

刹那からこの学園についていろいろな説明を聞きつつ、学園敷地内を歩いていた。

ここは相当なマンモス校だ。だが、僕の知識には入っていなかったようだ。

「広いな、ここは。それに、まるで日本じゃないみたいだ。」

「そうですね。ここは生徒でも迷ってしまう人が、年に何人か出てきますし。」

それからここは初代学園長からの意向で西洋文化を多く取り入れていますから。」

「そうなのか？」

「ええ、そうみたいです。」

ああ、それからこの後、買い物もしなければならぬので、さすがに今日全てを回るのは無理ですね。

今度この学園の地図をお渡ししますね。」

「それはありがたいな。ありがとう。」

「いえ、そんな。私も今年ここに来たばかりで慣れるのに苦労しましたから。お互い様です。」

「たしかに…慣れるのには苦労しそうだな。」

そういえば、その、背中に背負っているのって、刀か？」

「えっと、その、いえ。竹刀です。剣道部に所属してますので。」

「日曜日まで練習があるのか？大変だな。でも竹刀ってそんなに長いものだったか？」

「う、え、いや、これは、その、練習用です！！長いほうが、練習になるんです！」

「？……そうなのか。」

「そうです！！」

何故、そんなに必死なのかわからないが、まあ良いだろう。

そして僕らはたわいない話をしながら学園内を歩いて行った。

「ここは生協です。生活に必要なものは大体この生協で買えますが、今日は開いてません。」

買い物は、市街に出ましようか。」

「うん。よろしく頼むよ。刹那。」

「はい。」

ということで電車に乗って新宿に来ていた。

「人がいっぱいいるな。酔いそうだ。」

周りにはヒト一人ひと。それに自分の髪色にも問題があったか、相当目をひかれてしまう。

だが、気にしていても仕方がないので、気にしないことに決めた。

「ではまずは、服から買っていきましょうか。」

「ああ、そうだな。さすがにスーツ一着だけでは生活に支障が出るだろう。」

「スーツしか持っていないんですか？」

「うん。そうみたいだ。最初に着ていた服はとても着れたものじゃないし。」

それにしても、問題は、僕には今の流行というものが全く分からない。

センスというものに全く自信がないんだが…

どうしようか……。」

「それは……私も同じく……。」

「まあ、適当でいいか。」

「う。すみません、力になれず……。」

と刹那は落ち込んでしまった。

「いや、いいさ。それに刹那は十分力になってくれているよ。

すごく助かってる。」

「そう……言ってもらえると……。」

そうして店に入るや否や、ショップ店員に捕まってしまい、あれよこれよと僕に似合いそうな服を持ってきてくれた。

結果オーライというやつか。

その後日用品も買い学園に帰ることにした。

ライ先生を連れて新宿にやってきて買い物を買ませた。

私は普段はたいいてい学園内で用を済ませるので、お嬢様の護衛以外でこのようなところに来ることはない。

それにしても私の横を歩くこの人の目をひくことと言ったら、ものすごかった。

ただでさえ目をひく銀髪に、この容姿、すれ違う人全てが振り返っている。

主に女性の視線が熱い、気になるのは時折男性からも熱い視線が……

いや、さすがにそれは気のせいだろう。そう思うことにした。

そしてもう日も暮れて学園に帰り、クラブハウスに案内した。

「ここがクラブハウスです。明日から、またよろしくお願いしますね。」

では、私はこれで。」

と、去ろうとするとライ先生に呼びとめられた。

「待ってくれ、刹那。今日は本当に助かった。」

ありがとう。それで、これはお礼と言ってはあれなんだが……。」

と私に袋を渡してきた。

「……これは？」

「それは、さっき日用品を買っているときに見つけたんだ。」

刹那に似合うかなと思って……。」

「そんな……いつの間に……。」

あの、開けてみてもいいですか？」

「あ、ああ、構わない……けど、さっき言ったように自分のセンスには自信がないから」

期待しないでくれるとありがたい。」

表情は豊かではなかったが、それでも恥ずかしそうにしているライ先生を見て何故だか暖かい気持ちになった。

中には赤い、髪紐が入っていた。シンプルだが、使いやすそうだ。

「ありがとうございます！さっそく、つけてみますね。」

そして私は髪を束ねていたゴムをほどき、もらった紐で再び髪を束ねた。

「あの……どうでしょうか？」

「あ、ああ、とてもよく似合っている！……と、思う」

少しだがライ先生は微笑んだような気がした。本当に少しだが。

「そ、そう、ですか、ありがとうございます…大切にに使わせていただきますね。」

思えばこうして異性からプレゼントをされるのは初めてだ。そう意識すると急激に恥ずかしくなって私は駆け出した。

「あ、あのっ！では私はこれで！！失礼します！！」

あ、待てもう暗いから送っていくというライ先生の声に聞こえなかったふりをして

私はそのまま女子寮へと駆け込んだ。

お礼のつもりだったが、予想外に恥ずかしかった。

だけど、自分の見立ては合っていたようでほっとしていた。

それにしても刹那、足が速い。送っていくと叫んだときにはずいぶん遠くにいて聞こえなかったようだ。

やっぱり追いかけるべきだったかなと思っていると

突然高校生ほどの黒髪の男に声をかけられた。

「誰だ、おまえは？ここでなにをしている？」

男はじつと僕を睨みつけてくる。

「ああ、僕は今日からここに住むことになった

」

「ああ、お前がライか。俺はアッシュフォード高等学校1年のルル・シユ・ランペルージだ。」

学園長から話は聞いている。こっちだ。ついてこい。」

そついい彼は僕を部屋の前まで案内した。

「隣は俺の部屋だ。何かあれば訪ねてきてくれても構わないが……

一緒に住んでいる俺の妹は足と目が不自由でね、

大きな音には敏感なんだ。だから、大きな音とかを立てないでほしいんだ。」

「

妹思いの男らしい。

「ああ、もちろん。わかったよ。」

「そうか、わかってくれて嬉しいよ。よろしくな、ライ。」

そう言つて彼は表情を和らげた。

そして僕は部屋に入ると、予想外に疲れがたまっていたようで、何とかシャワーを浴びると

すぐに眠ってしまっていた。

翌朝、目が覚めてとりあえずスーツに着替えるとタカミチさんがやってきた。

女子中等部に案内してくれるらしい。

僕が担当するのはタカミチさんのクラスの1 - Aだ。

タカミチさんから顔写真付きのクラス名簿をもらって僕はざっと目を通した。

やはり女子中等部ということだけあって、やはり女子ばかりだ。

僕は何となく不安を覚えていた。

けど、刹那もいるみたいで、少し気持ちが楽になっていた。

校舎内は昨日までと打って変わって、非常に騒がしい。

女三人集まれば何とやらと言うが、数百人集まると、本当にもうとんでもないなと思う。

好奇の視線が痛い。

タカミチさんが立ち止まったのにつられて、僕も立ち止まる。

「ここが君が受け持つ1-Aだよ。このクラスは本当になんていうか…個性にあふれているが、

みんないい子たちばかりだから頑張ってくれ。」

「はい……。」

「じゃあここでちょっと待っていてくれ。」

僕が呼んだら入ってきて欲しい。」

そしてタカミチさんは教室内に入って行った。

声が聞こえる。

「今日からこのクラスに新しい副担任がつくことになりました。」

『え〜〜〜〜聞いてな〜〜〜い!!!!』

すごく元気な声が聞こえてきた。

「はは、そうだろうね。初めて言ったからね。

では、さっそく紹介しようと思います。

ライ先生!!!入ってきてください。」

中に入ると一斉に僕に30人ほどの視線が集まってきた。

が、そこまで緊張することはなかった。人前に立つことに慣れていたのだろうか？

それにしても妙に視線を感じる。特にすごいのは廊下側一番後ろの金髪の娘だ。

目を見開いてこちらを見ている。

何故だろう?と不思議に思っ て彼女を見ながら首を軽く傾げるとはつとしたように彼女は視線を逸らした。

なんだったんだ？

「初めまして。今日からこのクラスの副担任を勤めることになった、ライ・シルヴァニアだ。」

担当教科は英語の補佐だ。よろしく願います。

と僕は軽く頭を下げた。昨日とつさに出てきた偽名を使うように言われていた。

か

「蚊？」

飛んでいるのか？

「カッコー………っ！！！！」

な、なんだ？耳が壊れるかと思った。

「はいっ！！はいっ！！彼女はいらんですか！？？」

「どこから来たんですか!？」

「日本人!？」

「何歳ですか!？」

いろいろな質問が飛び交う。

ヘルプの意味を込めてタカミチさんや刹那を見ると、

二人は困ったように笑っていた。

あ、刹那、僕があげたのつけていてくれたみたいだ。嬉しい。

「はいはい、みんな落ち着いて。

質問は一人ずつだよ。」

とタカミチさんは手を叩きながらみんなを静めた。

「じゃあ、はい!!」

パイナップルのような頭をした少女が手を挙げた。

たしかあの子は……

「朝倉さん？」

「お!!先生もう覚えててくれてるんだ。嬉しいね。」

じゃあ、とりあえず、私が代表として質問します!!

先生随分若そうだけどおいくつですか？」

歳か…歳はいくつだろう…

昨日出会ったルルーシュくらいでいいか。

「16……かな？」

「んん？疑問形？つか若っ！！え？どういうこと！？」

「ブリタニアで大学を卒業して、こちらに研修にくることになった…らしい。」

「へえ！ブリタニアの大学を！！すごい！！

でもなんでさっきから疑問形？」

「いや、ちょっと、記憶喪失になってしまっ…生活には支障がないんだが、ここに来る前のことを覚えていないんだ。

でも学園長の意向でそのままこうして勤めることになったというわけだ。」

「ほうほう…ブリタニアからやってきた記憶喪失の天才美少年…これはネタになるわー！！！！

じゃあ次！彼女はいるんですか！？」

「記憶がないんで何とも言えないな。」

「あ、そか…ごめんごめん、じゃ、このクラスで好きなタイプは！？」

この少女…妙になれなれしい…まあしかたないか。

「そうだな……。」

と僕はクラスを見渡すが、正直刹那以外知らないのだ。そして僕は迷うことなく答えた。

「桜咲刹那。」

おおおおおおおおお！！

瞬間クラスが湧き上がった。

刹那は顔を真っ赤にして口をパクパクとしていた。

ああ、目立つのは恥ずかしいのか…申し訳ないことをしてしまった
なと心の中で謝る。

後で謝っておこう。

「桜咲さんかー！！！」

「せつちゃん……あんな顔するんや……。」

など様々な声が聞こえたが

「はいはい、そこまで！みんな席について！！」

HRは終わりだよ！授業の準備をして！！」

とタカミチが再び場を静めた。

こうして、僕の学園生活が幕を開いた。

それにしても今日は金髪の少女……

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル
の視線をこの日一日中感じていた。

彼女は一体何者だろうか……？

銀王と麻帆良10月2日？

side・エヴァンジェリン

昨日はじじいから妙な電話があった。

一昨日やって来た侵入者の面倒を私が見ろなどとほざいていた。

馬鹿じゃないのか？何故私がそんなことをしなければならないのだ。

当然のごとく、私はそれを断った。

のだが、また夜にじじいから電話がかかってきて、明日はその侵入者が副担任としてやってくるから

明日はさばらずに来て、顔だけでも覚えておいてくれとのことだ。

まあこの14年間、サウザンドマスターにかけられた呪いのせいで、何年も何年も中学生生活を繰り返しているのだ。

どうせ何をしていても退屈なのだから、まあ見ておいてやるかくらの気持ちで生返事をしておいた。

そして今私は教室にいる。

教室は昨日ものすごい美形を見たとか

しかもその美形がうちの制服の人と歩いていただとかそんな話で持ちきりだった。

ああ、くだらない。この年代の女子たちはこういう色恋沙汰には目がないらしい。

色恋か……とふと昔を思い出す。

400年前から、私の世界には色というものは無くなってしまったのだ。

そう、400年前のあの日から。もう何も感じない。

400年前ライは死んだ。

幸せになれと私に残して。

ふざけるなよ。お前がいないこの世界で、どうやって幸せになれるというんだ。

新しい出会い？そんなもの知るか。

それに、400年前のあの事件で、私の存在はますます危険視されてしまったのだ。

そんな私を、一体誰が受け入れると？

あの日から私は生きる気力を無くしてしまっていた。

そしてサウザンドマスターはそんな私に出会い、

「案外楽しいこともあるかもしれないぜ？」

と頼んでもいないのにふざけた呪いをかけて行った。そしてやつはそのまま帰ってこない。

死ぬんだったらこのふざけた呪いを解いてから死ねばいいものを…。

ああ、じつにくだらない。

「ライ先生！！入ってきてください」

ピクリと私は反応をしてしまった。

ライ…大嘘吐きの男の名前。私を置いて一人で去って行った男の名。

まさかそんな名前の奴が来るとは思わなかった。

ああ、不愉快だ、やはり今日もさぼるとしよう。

騒ぎに乗じて教室から出ようと席を立とうとしたその瞬間

一人の男が教室に入ってきた。

私は動けなくなってしまった。

ヒュッと肺に空気が流れ込み呼吸さえも止まってしまったような気がする。

男から視線が逸らせず、

動くことも、声を出すことも出来なかった。

似ているのだ。さっきまで考えていたあの男に。

ライに

似ているなどと言うようなものではない。

銀髪、碧眼、あの顔、立ち居振る舞い。

瓜二つ。まさに本人その物なのだ。

しかも400年前の姿そのままだ。

強いて違つところを挙げるとするならば、無表情、そして髪が少し短くなつてるところだろうか。

王としてのプレッシャーというか、威圧感も無くなっているように思う。

だが、あり得ない。ライはあのかとき死んだはずだ。

だがあの姿。ライより無表情だが、やはりライだ。

なんなんだ？ どういうことだ！？

じつとライに似た男を見ていると、奴は私の視線に気づいたのかこちらを見てきた。

そして、不思議そうに小首をかしげたのだ。

私は慌てて奴から目を逸らす。

いやいや、落ち着け、私！！ライが生きているはずはない。

あるとき死んだじゃないか。

それにあのライがあんな風に首をかしげてこちらをみるわけがない！

何なんだあれは！？ギャップ萌えて私を殺す気なのか！？

いやいやいやいや！落ち着け、いかんいかん、日本の文化に毒されてきたようだ。

それはもういい、だが、あれがライであるはずがない！

あの時生きていたのか？いや、生きていたとしても400年も人間が生きているはずがない！

ライであるわけがないのだ！！

「初めまして。今日からこのクラスの副担任を勤めることになった、ライ・シルヴァニアだ。」

っライの声が響いた！忘れるわけがない。この声。

ライの声だ……。

なんなんだ！？

なんなんだこれは！？

何者かの私への精神攻撃か！？

そうだとしたらなんて……

なんて見事な……

この真祖の吸血鬼である私の、唯一の弱点を、なんと的確に……！

わからないことだらけだがクラスの奴らが聞き出した情報は

記憶喪失。

歳は16歳。

記憶がないのなら違う可能性もある。ライは17歳だったな。

ブリタニアからやって来た。

ライならあり得るが、記憶がないのであればあてにはなるまい。

彼女はなし。それも記憶がないのならわかるはずはない。

好きなタイプ、桜咲刹那

とのことだった。

最後には少しばかり動揺してしまった。

いくら違うとは思っていても、ライの姿をしているだけでこうも動揺してしまうとは。

先ほどまで色恋などくだらないと笑っていた自分を嘲った。

あの二人は知り合いか？

後で刹那を問い詰めてやろう。

そうだ、私は今動揺している。

400年間重く、動くことのなかったこの心が、こつも簡単に。

動き、揺れているのだ。

敵の策略だろうとなんだだろうと、私は今、この状況に心が動いてい

る。

奴の正体を必ず突き止めてやる。

もしかしたら、本当の、本当に、ライなのかもしれない。

だが、もし悪意ある者の仕業ならば、私の心を乱した報い、受けてもらう。

手っ取り早い方法が一つある。

最後にはその手を使うでしょう。

s i d e ・桜咲刹那

まったく、あの人は…何を考えているんだろう。

あんなとんでもないことを平然と言うなんて…

おかげで1日大変だったのだ。

クラスメイトに知り合いなのかと問い詰められ、逃げるために休み時間毎に即教室を出て時間を潰していた。

そして今、部活へ行くため帰り支度をしていると、それを言った超本人に声をかけられた。

「刹那。朝はすまなかった。君の気持ちを考えず、勝手なことを言ってしまった。」

今何と言った！？私の気持ち！？どういうことだ！？まさか、朝のあれは本気だったとでも言うのか！？

あかん！！あかんよ！？うちにはこのちゃんがつ……………！！

「君が人に注目されることが苦手だったとは、考えが足りなかった。本当に申し訳ないことをしてしまった……………」

「うえ？あ、ああ、そういうことですか。大丈夫です。」

危ない危ない。勘違いしてしまうところだった。恥ずかしい……………。

「そうか？なら、いいんだが……………」

「はい、気にしないでください。」

「ああ、そう言ってもらえると助かるよ。」

じゃあ、僕はこれで……。」

とライ先生は教室を出ようと背を向けたのだが、突然振り返り

「ああ、そうだ、それ、使ってくれてるんだな。ありがとう、嬉しいよ。」

やっぱり、似合っていると思う。」

そう言って去って行った。

だから、何なんだ、あの人は……こういうことを恥ずかしげもなくさらりと言ってる……。

しかもいちいち気品があるというか……。

私はしばらく呆然とライ先生が出て行った扉を見ていた。

「おい、刹那。ちょっと聞きたいことがある。」

突如、魔力が私の周りを覆う。認識阻害の魔法らしい。

「エヴァンジェリンさん……。なんですか？」

声をかけてきたのはエヴァンジェリンさんだった。めったに話しかけてくることのない彼女に話しかけられ

私は内心驚いていた。

いつもどこか遠くを見ていたり、そもそも、教室にいることが少ない。

彼女は今はとてもそうは見えないが、真祖の吸血鬼で、今はサウザンドマスターに呪いをかけられ、延々と中学生生活を繰り返しているらしい。

呪いをかけられる前は、闇の福音だとか、悪しき音信だとか、童姿の闇の魔王だとか、不死の魔法使いだとかなんともはずk……

禍々しい通り名がついている吸血鬼だったそうだ。

なんでも魔法関係者にはは、日本におけるなまはげ的な扱いらしい。

しかも元賞金1000万ドルと言う賞金首だった。なんでも一国を一夜で滅ぼしたとの伝説があるらしい。真偽のほどはわからないが……。

そんなエヴァンジェリンさんが私に一体何の用なのか？

「貴様、今日やって来たあの副担任とは知り合いか？」

ライ先生のことか。一体どうしたのだろう。

「いえ、知り合いというか、昨日学園長に頼まれて、彼の日用品を買いに行ったり、この学園の案内をしたんです。」

それでちょっと話して仲良くなったというか…なんていうんでしょう？

でも、それがどうかしたんですか？」

「いや、ちょっと気になることがあってな……。」

それであいつについてお前の知っていることを話してもらっぞ。」

「あれ？エヴァンジェリンさんのことだから、てっきりもう学園長から話が行っているものと思ってました。」

そして私は昨日の晩、学園長から聞いたライ先生についての詳しい情報を伝えた。

記憶喪失のこと、

名前のこと、

追われていたこと、

ここで様子を見ることにしたことなどをだ。

「……そうか…いや、だが、もしかすると……可能性は……。」

エヴァンジェリンさんは何やら呟いていたが聞こえない。

そしてエヴァンジェリンさんは礼を言つと教室から出て行った。

何だっただんたろうか？

s i d e ・エヴァンジェリン

刹那の話を聞いてみたものの、やはり確信めいた情報は得られなかった。

やはりこれはあの手を使うしかなさそうだ。

昇降口を出ると私を悩ませる種がそこにいた。

シルヴァニアだ。

ちょうどいい、始めるとするか。

「やあ、シルヴァニア先生。貴様と話がしたいんだが、

ここではあれだ、ついて来い。」

「……君は僕のクラスのエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルか。」

ああ、構わないよ。僕も君と話してみたいと思っていたんだ。

でも、どこへ？」

「私の家だ。」

そして私は歩きだした。

s i d e ・ ライ

授業も終わり、これから学園を回ってみようかと思っていると、

うちのクラスのエヴァンジェリンに声をかけられた。

ずいぶんと高圧的だったが、別にそこまで不快ではなかった。妙にこつという態度が様になっている子だ。

僕としても気になっていたので、断る理由もなくついていくことにした。

しばらく歩いていると、学園の外れにログハウスが見えてきた。

「君は、あんなところに一人で住んでいるのか？」

「いや、一人同居人がいる。」

「そうか、でもどうしてあんなところに？」

「答える義務はない。貴様もクラブハウスに住んでいるんだろう？」

僕がクラブハウスに住んでいるのは、男子寮が一杯だったのと、女子寮を断ったからと、ログハウスの宿主に断られたからだだったな。

まあ、なにか事情があるのだろう。

ん？ログハウス？

「もしかして、学園長が言っていたログハウスの宿主というのは君

のことか？」

「ん？ああ、そうなんじゃないか？

そういえば昨日じじいからお前を世話しろとかいう電話がかかってきたな。」

やはり宿主というのはこの子らしい。まさか女性の家だとは思わなかった。

あの老人……そこまでして僕を女の子と暮して欲しかったのか？意味がわからない。

「着いたぞ。入れ。」

中にはたくさんの人形が飾ってあった。ファンシーともグロテスクとも取れる、そんな部屋だ。

居り場もなく立ちすくんでいると、座れと声がかかる。

僕は近くの椅子に腰を落とした。

「単刀直入に聞く。シルヴァニア、貴様、何者だ？何故この学園にやって来た？」

「それについては答えられないな。」

「なんだと?」

エヴァンジェリンの眉がピクリと動く。

「わからないんだ。どうしてここにいいのか。」

僕が何者なのかも。どこから来たのかも。何も思い出せないんだ。

けどどついうわけか、知識だけはある。気味が悪いほどにだ。」

「……そうか。」

「それから、ライで言い。シルヴァニアと言うのはどうにも慣れない。」

「……断る。私がおその名を呼ぶのは一人だけだ。」

「ライと言う知り合いがいるのか?」

「答える義理はない。」

「……そうか、なら仕方ないな。」

ガチャリ、とドアが開いた。

「ただいま帰りました、マスター。」

お客様ですか？』

「ああ、おかえり。」

エヴァンジェリンが言っていた同居人だろう。長い緑の髪で、耳に妙なアクセサリー？をつけている。

彼女は僕のクラスの絡繰茶々丸か……。

『こんばんは、シルヴァニア先生。1 - Aの絡繰茶々丸です。

よろしくお願いします。』

「ああ、よろしく、茶々丸。

僕のことはライでいい。」

『了解しました。ライ先生。』

「茶々丸！シルヴァニア先生に飛びきり落ち着く紅茶を出してやれ！」

『…了解しました、マスター。』

いいか、とびきりだぞ。と念押ししている。

「茶々丸の煎れるお茶は最高だぞ。」

とエヴァンジェリンは自慢げに言う。

「そうか、それは楽しみだ。」

「お待たせいたしました。どうぞ。」

そして紅茶が渡される。いい香りだ。

いただきます、と一口紅茶を飲んだ

その瞬間、強烈な眠気が僕を襲う。

なんだ！？これは！？身体が重い、動けない。

最後に僕が見たのは、僕に近づいてくるエヴァンジェリンの姿だった。

誰かが泣いている。誰だ？泣かないでくれ。

この声を聞いていると何故だかとても苦しくなる。

目を覚ますとそこには僕の腕の中で泣きじゃくるエヴァンジェリンの姿があった。

茶々丸は慌てたようにおろおろしている。

「っライ……ライだっ……本当に……っあのっ……生きてた……！」

エヴァンジェリンは何を言っているんだろう。

「エ……ヴァンジェリン？どうして泣いているんだ？」

エヴァンジェリンは僕の声驚いたのか、びくりと顔をあげた。

「っライ……お前……どうしてここに……いる……！」

「どうした？さっき名前は呼ばないと言っていなかったか？」

それに、さっきもわからないと言っただろう。

それよりも、エヴァンジェリン、僕に一体何をした？それに、どうして泣いている？」

「っ馬鹿者め！泣いてなどおらぬわ……！私が泣くわけがないだろう

「！！これは花粉症だ。」

「花粉症…にしてはひどくないか？」

さつきまで普通だったと思うんだが。

「じゃあ質問を変えよう。どうして僕にしがみついている？それと、僕に何か盛っただろう？」

「っ、これはっそのっ、ちがつ！！」

慌てたように僕から離れようとするエヴァンジェリン。しかし僕は逃げようとする彼女の腕を掴んだ。

しかし彼女も抵抗する。

このままでは埒があかない、仕方がない、あの力を使うか……。

「ライが命じる、僕の質問に答えろ！僕に一体なにをした？」

しかし、僕の声に続いたのは沈黙だけだった。

おかしい、まさかこの力を失ってしまったのか！？

焦っていると、エヴァンジェリンが口を開く。

「今の……ギアスだな？」

「っ！？何故知っている！？」

何故だ！？何故彼女がギアスのことを知っている！？

「……ああ、やはりお前はライだよ。間違いない。」

確信したと彼女は言う。

「？……どういうことだ。」

「そうだな、なんと答えたらいいか……」

私は昔のお前を知っている。」

昔の僕だ！？記憶を失う前の僕を知っているということか！？

「今お前は私にギアスを使っただろう？だが、何も起こらなかった。昔一度私にそれをかけたことがあるからだ。」

それでは証拠にならないか？」

……たしかにギアスを発動したはずなのにかからなかった。僕は一度彼女にギアスをかけたことがある？

そういうことなのか？

「それから、悪いがさつきはお前を眠らせている間に、お前の血を……

調べさせてもらった。何か薬みたいな物も混じっていたが、間違いなく、ブリタニア王族と、日本の皇族の血が混じっていた。

これは、ライ以外にありえない。

思い出せないか？ライ？」

ブリタニアの王族と、日本の皇族の血が混ざっているだと？僕の血が？

ますますわからない。僕は一体何者なんだ？思い出そうとすると、やはり頭に霧がかかったかのように思い出せない。

「わからない……。思い……。出せない。」

そついうとエヴァンジェリンは悲しげな顔をした。ああ、そんな顔をするな。

なぜだろう、すごく、辛くなる。

「……そうか。」

だが、断言する。お前は間違いなく私の知るライだ！

ブリタニアの元王、ライラル・フォン・ブリタニアだ！

覚えておけ。」

……王だと？僕が？

どういうことだ！？

痛いっ！頭が割れそうに痛い！！なんだ？思い出そうとするとっ頭が！！

「っおい！ライ！大丈夫か！？」

エヴァンジェリンが心配そうに僕を見る。

「っああ、大丈夫だ。そんな顔をするな。

すまないな、思い出せなくて……。」

「いいさ、いつかきつと思ひ出す。それに、思い出せなくてもライ

はライだ。

ライだということに変わりはない。」

エヴァンジェリンはエヴァンジェリンだろう？

っなんだ？今のは……？

「どうした？ライ。」

「…不思議だな、どういいうわけかそれに似たような言葉を君に言ったことがあるような気がする。」

「……ふふ、そうか……。そんなこともあったかもしれないな。」

とエヴァンジェリンは言う。

「そうだ、二度目になるが、私の正体をお前に伝えておこう。」

私はな

「

僕はどうかやら二度目となるらしいその言葉に衝撃を受けた。

だが、何故だかすんなりと受け止めることができたのだった。

まるで、それを知っていたかのように。

それにしても、まさか、エヴァが…エヴァンジェリンにそう呼べと言われた。

…血を調べたというのは、そういうことなのか？

まあ、納得と言えば納得か。血液検査の結果を出すにしては、いくらなんでも早すぎるからな。

そしてエヴァは最後に僕にとって最も衝撃的な事実を言ったのだ。

僕が400年前の人間だと。

僕の過去を知るものに出会えて安心していたが、どうやらまだまだ謎だらけらしい。

エヴァのためにも、自分のためにも、早く思い出さなくては心に決めた。

銀王と麻帆良10月2日? (後書き)

これで……なんとか移せた……かな?

サーバーがパンクする等考えてもいませんでした。

短編ユニーク4000人超えてました、ありがとうございます。あ、もちろん全話合わせてです。

嬉しいですねえ、こんなに見てくださっている方がいて。

ネギま人気かロスカラ人気か……すごいなあ……。

ご感想くださった方、

ご感想に返信できないまま短編の方消してしまったので、申し訳ないです……。

ご感想、アドバイス等ありましたらぜひよろしくお願いします。

銀王と麻帆良10月2日? (前書き)

side方式やってみました。今回短いです。

銀王と麻帆良10月2日？

エヴァンジェリンに僕の過去を聞き、クラブハウスの自室に戻って来た。

あれからまだ夜は明けておらず、まだ夜明け前の朝の3時だ

まさか一日目にして記憶の手がかりを得ることになるとは思わなかった。

だけど正直なところ実感はわからない。

もちろんエヴァの話信じていない訳ではない。

ないのだが、やはり自分が400年前の人間、そのうえ王だったと突然言われても戸惑ってしまうのは仕方ないことではないだろうか？

自分の過去を考えれば考えるほどに、頭の中に霧がかかったかのようになんとも思えない。

そんな悶々とした夜の中、眠れるはずもなく、ただ霧がかった思考とともにクラブハウスの一室で一夜明けるのを待っている。

明日、いや今日も仕事があるのだが、幸いにも、皮肉にも言うべきかエヴァンジェリンの家で眠っていたためおそらく仕事に差し支えないだろう。

まだ4時か…。このまま部屋にいても眠れないし、いっそ散歩にでるのも気が晴れていいかもしれない。

そして僕はクラブハウスを後にした。

「あれ？シルヴァニア先生？」

おはようございます

と、辺りを適当にぶらついていると突然誰かから声をかけられた。

「おはよう。びっくりした。まさかこんな時間に声をかけられるとは思わなかった」

「あはは。私もこんな時間に知ってる人に会うとは思いませんでした」

「君は、たしかうちのクラスの神楽坂明日菜…さんだったかな」

「わ、すごいですね！もう顔と名前覚えてるんですか？」

「いいや。まだまだだよ。今は自分のこともよくわからないから、せめて周りのことはわかるようにしておこうかなって。」

「…あ、そっか。記憶喪失…って言ってましたね。」

「うん。困ったことに。ここに来る前のこと全然覚えてないんだ。不思議なことに、生活に必要なこととか勉強とかは無駄に頭に入っ

てるんだけどな。」

本当に不思議だ。怖いくらいに。

「……ちょっと、私と似てますね。」

明日菜が小さく呟いた。

「似てる？」

「あ、いえ、その……私も……この学園に来る前のこと、覚えてなくて」

学園長のお世話になってるようなものなんです。とアスナは言う。

「そう、なのか。……やっぱり昔のこと思い出したい？」

「うん。思い出したいって言えば思い出したいけど。でも、別にいいかなとも思うんですよね。昔のことばかり気にするのは、今私によくしてくれてる人達に失礼かなって思うんです」

「……そう、か。これから記憶探しをしようと意気込んでいた身としては、身に余る言葉だ……僕も身の振り方をよく考えないといけないな」

「あ！すみません！そんなつもりじゃ……！！昔の自分を知りたいのなんて当たり前のことだと思いますよ！！
それにほら、私はどちらかと言うと諦めの境地って言つか、考えるのめんどくさくなっただっていうか……」

明日菜がしまったとばかりに必死にフォローしてくる。

「そんなに必死にならなくても大丈夫だ。気にしてない」

「あ、その…すみませんでした！！」

「いいよ」

「でも…」

「気にしなくていい。…そうだな、そんなに気にするなら今度道案内がてら学園の散歩にでも付き合ってくれ。まだ学園内を把握していないし、何か思いだすことがあるかもしれない。これでおあいこってことでどうだ？」

「あ、はい！もちろん構いませんよ！」

「ありがとう。よろしく頼む。神楽坂さん」

「あ、なんか神楽坂さんって違和感あるっていうかむずかゆいのでアスナでいいですよ」

「そうか？じゃあアスナ、僕のことまでライで構わない。シルヴァニアは正直しつくりこないというか、むずかゆい」

とっさに作った偽名だからとは言わないが。

「あはは、なんですかそれ。わかりました、ライ先生。これからよろしく願います」

「こちらこそ。

ああ、ところでアスナ。そういえばこんな時間から何をしているんだ？」

「え？あ、いつけない！バイトです！！新聞配達のバイト！！学園長にお世話になりっぱなしなのは嫌なんで、ちよつとでも学費とか返したくて！！ライ先生！私、遅刻しそうなので失礼します！！」

そう言いアスナは凄い勢いでダッシュした。凄い速さだ。

それにしても学費を返す…か。まだ12歳のはずなのにえらいな。そんなアスナを僕は応援せずにはいられなかった。

「アスナ！！」

「っはい！？」

「頑張って」

「っっはい!!」

そしてアスナは走り去って行った。

記憶喪失仲間、というのはおかしいが、自分と似たような状況におちいつている人と話すとなんとなく安心というか、大丈夫な気がする。てくるから不思議だ。

アスナと話をしたことで、数時間前まで一人で悶々と考えていたことが少し軽くなったような気がする。

この散歩はいい気分転換になったようだ。

そろそろ学校へ行く準備をしよう。

僕は一応補佐のはずなのだが、何故か今日は英語の授業を受け持つことになっている。

自信はないが、できることから精一杯やっていくことにしよう。

そして僕は一度クラブハウスに戻り、シャワーを浴びて学校へ行く支度を始めた。

『きりーっ！礼、着席』

お願いします

と教室に声が響いた。人前に立つことに苦手意識はないが、上手く授業を進められるか正直緊張する。

そして何より一部視線が熱い。
気付かない方が無理なんじゃないかと言うほどに熱い視線を感じる。

左奥窓際に座る少女、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ。

昨日のこともあって、正直僕はどうしたらいいかわからないでいる。

彼女は僕が知らない僕を知っているのだ。それが今の僕には怖くもある。その事実がいまいちぴんとこず、まだ受け入れるには時間が必要だと言っのが僕の結論だ。

いきなり答えを突き付けられても、過程がわからなければ理解など

出来ない数学のように、今はまだ段階を踏まなければならないときなのだと思う。

答えを先に知っていることが近道になるのか、裏目に出るかはわからないがちょっとずつ解いていかなければならない問題だろう。

そして、今さしあたってのやるべきことはこの授業だ。

誰かを当てようとする面白いくらいに顔を背ける者がいる。

特に激しいのは今日の朝知り合った少女

「はいじゃあアスナ。15ページのマイクとエミの会話訳してみろ。」

ちょー！ライ先生ひどっ！

と言いつつアスナは少々教科書を読み始める。

「えーっと、

『ハイ！マイク！あなたは…エウロペ…から来ましたか？』

『いいえ。エミ。私は…エウロペから…来ていません。私の…羽はエウロペから…来ました？』何これ意味わかんない。」

「…はい、もういいぞ。そうだな…全く理解していないことは無いと思うんだが、とりあえず単語を覚えてみると今より英語がわかるようになると思う。」

今のは単語以外は間違えていなかったしな。まあ『来ましたか』じゃなくて『出身ですか』の方がよかったかなとは思うけど、エウロペって言ってたのはヨーロッパ。羽はむしろよくそっちが出てきたなと誉めたい位だ。フェザーじゃなくてファザーな。次、頑張っ

「うっ…はい…」

「アスナ英語苦手やからなあ」

黒髪の少女がアスナを励ます。確か近衛このかだったな。

「あら、苦手なのは英語だけじゃないのではなくて？」

金髪の少女がそれを茶化す。

雪広あやか…だったな。

それを聞いたアスナは雪広につかみかかる。

「何をー！？このシヨタコン委員長！！」

「うるさいですわ！このオジコンバカ猿怪力女！！」

シヨタコンとかオジコンってなんだろう？と思いつつ、ケンカを止めに入る。

「こら、二人とも落ち着け授業中だぞ。雪広！今のはお前が悪い、頑張ってる人を馬鹿にするのは良くない。アスナに謝るんだ。」

「うっ…はい、その……言い過ぎましたわ。ご、ごめんなさい」

「え、あ、いやいいわよ。悔しいけど…馬鹿なのはホントだし…」

「はい、二人ともいい子だな。じゃあ席に着こうか。」

二人の頭をポンポンと叩くように撫で、席に着くよう促した。

二人とも大人しく席に着いてくれた、ところでチャイムが鳴る。

「ん、終わりだな。日直ー」

『きりーつ、礼、着席』

ありがとうございました

の声が響き、なんとか授業を終えることができた。

「あ、そうだ、アスナ。さっき悔しいって言ってたな。今度放課後、補講でもやってみるか？」

「えゝ？あ、あははゝゝいえー部活があるものでゝゝ補講はちょっとゝゝ」

「そうかゝゝ。もっと君と話す機会を増やしてみたかったんだが。残念だな。」

記憶喪失仲間として色々参考になることもあるかと思ったが残念だ。

「え？え？そ、それってどういつ？」

突然アスナが狼狽え始めた。どうかしたんだろうか？

『あー！！ライ先生がアスナ口説いてるー！！』

一人の生徒が大声で叫んだ。

口説く？

僕がいつアスナを口説いたと言っただろう。

瞬間、教室中が大暴れを始めたようだった。

アスナは「私には高畑先生がー！」と謎の言葉を残して教室から飛び出し、

生徒達はそう言えばアスナだけ呼び捨てだったねなどと言う質問攻めをしてきたり

誰かは机か椅子を倒してしまっていたり、それはもう色々と大変だった。

昨日今日の疲れが一気に来たような気がする。

でも充実しているとも感じる。

今は空っぽな記憶だけど、いつかこんな記憶で埋まればいいと思った。

まだまだ副担任兼記憶探しの生活は、これからどうなるかわからないこととただけけど、

まずは手探りに少しずつやっていくのもいいんじゃないかと思う。

銀王と麻帆良10月2日? (後書き)

なんとなく第4話です。

半年ぶりです。待っていてくださった方おりましたら嬉しい反面、大変申し訳ないです。

半年経ってしまったら、小説方向性も変わってしまうことを実感しました。最初考えていたのと全く違います…おかしいなあ。

感想、評価等ありましたら是非よろしくお願いします。

銀王と麻帆良10月2日？

さて、授業も終わり教室での騒動をなんとか抜け出すことのできた僕は、とりあえず学校を出ることにした。

それにしてもさっきはほんとうに大変だった。

アスナが教室を飛び出していったあと

「なんで名前呼び！？」

「いつ知り合ったの！？」

「まさか先生アスナのこと狙ってるの！？」 e t c .

様々な質問が飛びかかってきたのだ。

それにひとつひとつ丁寧に答えていると突然

ズドンっ

と重たい音が教室に響いた。

何事かと音がしたほうを皆が一齐に見るとそこには、何故か壊れた机と、こちらの方に身体を向け、ただならぬ雰囲気であつむいているエヴァンジェリンがいた。

「うわ！エヴァちゃん！？机どうしたの！？」

と、たしか椎名桜子といったか、桜子が心配そうに聞いた。

エヴァンジェリンはそれを無視し、近づいてきたのだ。その様子に擬音をつけるとするならばゆらりというのが正しいだろうか？

静かに、ゆっくり、しかし確実にこちらへと近づいてくるエヴァンジェリンは恐怖を感じさせるものだった。

そしてエヴァンジェリンはうつむいたまま僕に声をかけてきた。

「……なあ、ライ先生？周りが偉く騒いでいるようだが、要するに、今日の朝、散歩しているときに、バイトへ向かう神楽坂明日菜と遭遇し、世間話をして……少し、仲良くなっただけ、ということだな？」

「あ、ああ。そうだが」

エヴァンジェリンのただならぬ気配に思わず冷や汗が出てしまう。

僕の近くにいた生徒はエヴァンジェリンのただならぬ気配を察知し少しでもエヴァンジェリンから逃れるかのように僕の背中に逃げ込んだ。他の生徒も糸が張り詰めたかのような空気にただ身をすくませている。

「……断じて、神楽坂明日菜を狙っているというわけではないんだな？」

「だから、狙うという意味がよくわからないんだが……。まだ知りあつてから数時間しか立っていない上に、アスナは生徒だぞ？」

「ふ、ふふ、そうか、そうだな。ただの生徒だな。それにまだ出会つて数時間……私の方が……」

「つて……おい貴様ら！いつまでライにまとわりついているつもりだ！事情がわかつたのだからとつと散らんか！」

なにか納得したかと思うとエヴァンジェリンは顔を上げ僕の周りにいた生徒たちを追い払った。

その勢いに飲まれた生徒たちは渋々というように僕の周りから離れていった。

正直助かった、がしかし

「エヴァンジェリン？何を怒っているのかわからないが、皆が怯えるような行動はよくないと思う」

そんなに高圧的だと友人をなくしてしまうのではないだろうか。

そんなエヴァンジェリンの今後が少し心配になり、注意しておくことにした。

「なっ！あれはライが……」

「僕？僕が何かしてしまったか？それなら謝るが…でもさっきみたいなのはもうしないように気をつけてくれ」

「うっ、いや！でも！……っく、わかった…気をつける…」

「ん、いい子だな」

先ほどアスナ達にしたようにばんぽんとエヴァンジェリンの頭を撫でた。

「……ライ、お前は本当に昔からこういう……無自覚だから困る」

自覚？

「何の話だ？」

「……いや、なんでもない。ところでこれからどうするんだ？」

よかったらお茶でも、という彼女の誘いをあいにく職員会議があるので断った。

職員会議がなくとも彼女の誘いを断っていただろうと思う。やはり今は彼女との距離がつかめない。

どうしたらいいかわからないのだ。ライはライだと彼女は言ってくれた。それは今の僕にはとても心強くもあり、同時に不安にさせる言葉でもある。

僕は今自分自身が一番わからず、信じられないのだ。そんな自分を信頼している彼女に申し訳がないというべきか、立つ瀬ないというべきか。

とにかくにも顔を合わせづらいうことは間違いない。時間が

必要だ。

そして今僕は職員会議を終え、学園内を歩いて見ることにしたのだ。

下足箱を少し出た所で先程教室を飛び出していったアスナを見つけた。向こうもこちらに気づいたようでそろりと気まずそうに近寄ってきた。

「あ、あはは、その、ライ先生、さっきはその急に飛び出しちゃってすみません」

「いや、構わないが、急に走って飛び出すから驚いたよ。どうして急に飛び出したんだ？」

「え！？それは…その…ちょっと急用があったもので」

あはははとアスナは困ったように笑った。

「そうだったのか…なら、仕方ない…のか？」

少し腑に落ちないところもあったが詮索はやめておく。

「あの後、大変だったらしいですね。なんでもエヴァちゃんが暴走したとか…」

「ああ、たしかに、暴走というのはちょっと違うような気がするが、アスナが出ていった後大変だったのは本当だな。」

なぜだかクラスの子達に囲まれて本当にどうしようかと思ったよとアスナに言うときアスナはまた困ったように笑う。

「それで、ライ先生はもう帰りですか？」

とアスナが尋ねてきた。

「いや、これからまたちょっと散歩でもしてみようかと。まだまだわからないことだらけだからな。記憶だけじゃなくて、この学園のこと」

「あ、じゃあ私付き合いますよ」

「え？でも、いいのか？」

「なーに言ってるんですか。先生が朝言ったんじゃないですか」

「それはそうだが……」

願ってもない申し出に少々戸惑ってしまった。

「うん、じゃあよろしく頼む」

「頼まりましたー」

とアスナは笑いながら軽い敬礼を試みせた。

「やっぱり…広いなここは。」

「ですよー。もう一つの街ですもんねこれ」

「建物も西洋文化って感じだし、正直自分がどこにいるのかわからなくなってしまうな」

「ライ先生はブリタニアから来たんですよね？こういう建物をみて懐かしいとか感じたりは…？」

「こういう建物の様式が懐かしい？どうだろう？知識として西洋文化だと分かる程度で、懐かしいとか言う感情は湧いてこない。」

「しないな。全く知らない風景だとしか感じない。」

「そうですか…やっぱりそう簡単に思い出したりするようなものじゃないですよー」

「ありがとう。気にしてくれて。でもアスナが気に病む必要はない。こうやって付き合ってくれるだけでもずいぶん気が晴れるし助かつ

てる」

「そ、そうですね？そう言ってもらえると…嬉しい、です。」

あ、そうだ。どこか行きたいとことかありますか？とアスナが聞いてきた。

「そうだな、右も左もわからないから特に目的はないが、一番気になるのはあれだな。」

と、ぼくはそれを指さす。

「あれ、ですか…やっぱあれ、気になっちゃいますよね」

「うん。あれはなんといつても存在感がある」

「あ、あのでもあそこちょっと距離あるんで、あそこ行くまでにちよつとそのへんうつろつきません？」

「ん？ああ、もちろん構わない」

「そついえば、エヴァちゃんとは知り合いなんですか？」

目的地に行くまでの道中、色々と寄り道をしながら話しているとアスナがそう尋ねてきた。

「ああ…そつ…みたいだ。」

「みたい…ですか。」

「ああ、僕は覚えていなくて、彼女の話聞いても全然思い出せないし、むしろ混乱したと言うか、正直どう接したらいいのかわからない」

「そう…ですか。昔のことを聞いても思い出せないとなると気まずいでしょうね。」

「それに、何より自分が信じられなくて。例えば昔の自分が超極悪人だったかもしれないとか考えると、今ここにいていいんだろうかって思う」

王だったとは聞いたが、自分がどんな王だったのかなど、エヴァはなぜか教えてくれなかった。悪い予感も頭によぎる。

うーん、とアスナは何かを考えている。

「でも私は今のライ先生は良い人だと思ってますよ。まだ知りあつて1日も経ってないですけど…悪い人だったとは思えません。いいんじゃないですか？大事なのはこれからじゃないですか！！昔どんな人間だったか悩むよりも今を楽しんだほうが絶対いいですよ！！そのついでに昔のこと思い出せたら一石二鳥だし！！」

うーん…我ながら軽い考え過ぎですかね…

とアスナは首をひねる。

「いいや。参考になったよありがとう」

「もしもライ先生が極悪人だったら私が一発ぶん殴って目を覚まさせてあげます！」

「それは…頼もしいな。でももし僕が本当に危ないやつだったら逃げてくれよ」

「あはは。ま、ないと思いますけどね」

「アスナがそう言ってくれるなら、そうなのかもしれないな」

自分のことは信じられないが誰かにそう言ってくれるだけで気持ちが楽になる。

「あ、笑った」

「え？」

「先生今少し笑ってましたよ」

「そう、か？というかそんなに驚くほどのことか？」

「ええ！それはもう！！今まで完全に無表情でしたもん！！あっても困った顔くらいで！」

「え？そんなつもりはなかったんだが…」

「そうなんですか？じゃあ先生！！ちょっと笑ってみてくださいよ！！」

「…」

言われたとおり笑ってみる。

「つぶ！！ちょ、先生怖い怖い！！あはははははははははは！！」

「お、おい。そんなにひどいか？」

「あははっ！すみません！！でもっ…今の顔っ…あはははははははははは！！涙出てきた」

僕は一体どんな顔をしていたんだろうか、盛大に笑うアスナを見ているとだんだん僕の口元も緩んでくる

「っく、ははっ、おい、笑いすぎだ」

「あ！先生！！今ちゃんと笑ってますよっ！っはは」

「そうか？ならアスナのおかげだな」

「なんですかそれ！」

そんな会話が余計におかしくてしばらく僕は笑い合っていた。

「あーおもしろかった」

ライ先生がすごい顔するからとアスナは言う

「そんなにすごい顔してた？」

「ええ、そりゃあもう!」

「そ、そうか、なんだか恥ずかしいな。でもなんだか初めてあんなに笑った気がする」

「え? ってことは私が人類初のライ先生の大爆笑姿の目撃者ってことですね!」

「あははっなんだそれは」

「うん、でも今思いましたけど。ライ先生、笑ったらヤバイですよ。やっぱりあまり笑わないほうが…」

特に微笑は…いや私には高畑先生がいるからいいんだけど…とアスナが何やら呟いている

「おいおい、なんだそれは。もうヤバイ顔なのはわかったから、さっきのことはもうからかわないでくれるとありがたい…恥ずかしいから…」

「いえ、そつちも確かにヤバかったですけど、今のヤバイはそういうことじゃなくて……」

「ん？」

「……いえ、いいです、いや、よくない……かも？っていうか小首をかしげないでくださいなんかヤバイですから。ってああもう何が言いたいのか私！？」

「いや、こつちが聞きたい」

「あ、あー！あー！！そう言えば記憶喪失の件！わかっていることはどれくらいなんですか？」

「またずいぶんと突然だな。構わないが。……そうだな。正直覚えていたのは名前だけだ。」

「でも、エヴァちゃんから得た情報とかもあるんでしょう？」

「そう、だな…エヴァの話聞いても自分の正確な歳もわからなかったよ」

「……あれ？でも16歳って…それにほらここに就職するときに…履歴書？だっけ？出したんじゃないんですか？」

「……ここだけの話、本当に、僕がここにいられるのは学園長の厚意のおかげなんだ。学園内をさまよっていたところを保護されて、あとはもう、勢いに飲まれてしまった感じでこうしてここにいる。だから年齢もわからないし、もしかしたら僕は君よりずっと年上のおっさんかもしれないな」

エヴァの話が本当ならば少なくとも400歳差だとは流石に言えない。

「あはは、そんなまさか。…でも、そんなこと私に言っちゃってよかったんですか？」

「どうだろう。自分が危ない人間かもしれないってことを知ってくれている人は多少なりともいてくれたほうがいいと思ってる。それにさつき、ただの慰めだったとしても僕の事を良い人だって言ってくれたの嬉しかったから…後々信頼を裏切るのは嫌だったんだ。まあ、このことは、他言無用で頼む。もうこれ以上誰かに言う必要はないと思ってる。」

アスナの存在だけで、ずいぶんと気持ちが助かっている自分がいる。

と、突然ピリリと何かが鳴った。

アスナは何かをポケットから取り出した。あれは…ケータイか。初めて見たきがするがやっぱり知っている。

アスナはケータイを開き何かを確認したかと思うと先ほど言っていた目的地に向かおうと申し出た。

そして僕らは目的地、世界樹に向かった。

パンパーン！！

と世界樹に到着すると共に何かの破裂音が響いた。

「な、なんだ？」

『ライせんせーい！麻帆良学園によっこそー！』

そこには1 - Aのクラス全員と高畑先生がいた。

「ア、アスナ？」

「えへへ、驚きました？クラスのみんなでライ先生の歓迎会やろうってことになって私先生をここに連れてくるように頼まれてたんです。先生が世界樹行きたいって言ったときはどうしようかと思いましたが……でもその後メールが来るまで忘れちゃってたんですけどね」

あははとアスナが苦笑いをしている。

「そうだったのか……すごく驚いた。みんな、ありがとう歓迎してくれて嬉しいよ」

僕は照れくさいやら嬉しいやらで思わずはにかんでしまった。

瞬間、なぜか一瞬時が止まったような気がした。

そして

『ヤバ――――いい……！』

本日二度目のお祭り騒ぎが始まった。

（ア、アスナ？僕はまたあの失敗を繰り返してしまったのか？）

（い、いえ、成功したから失敗したと言っかなんというか…（ナニコレ美人でイケメンで優しくて天然で美形で可愛いって……いやでも私には高r y）

(ああ、そうだと聞きたいことがあったんだけど、しよたくん、おじ
こんつてなんだ？)

(…え？)

銀王と麻帆良10月2日? (後書き)

思い立ったが吉日。ということで書きました。書く気のあるときに書いとかないと…

っていきあたりばったりなのがモロバレですね…

というか20000PV、ユニーク3200だなんて本当にもうありがとうございます。

あーびつくりした。こんなに読んでくださっている方がいらっしやるなんて素直に嬉しいです。

ここで言うのもあれですが、まほらヴァンプの方もたくさん読んでくださった方がいて嬉しいです。

それに見合うだけの内容の話がかけていたらいいんですけどね…汗

感想。評価等ありましたらぜひよろしく願います。

銀王と麻帆良10月2日？

世界樹の前で僕の歓迎会が行われていた。
クラス全員が集まっており、凄く嬉しい。

先ほどの騒ぎも収まり、今はそれぞれまったりと時間を過ごしている

「やあ、ライ先生、アスナ君こんばんは。」

「あー！高畑先生！！こんばんは！！」

ジュースを片手にアスナと談笑していると高畑先生から声をかけられた。

「こんばんは、高畑先生」

「ライ先生、今日はお疲れ様だったね。初めての授業とは思えないくらい良い授業だったと思うよ」

「いえ、そんなことはないです。もういっぱいいいでした…」

「ははは、謙遜しなくてもいいじゃないか。ほんとよくまとめたよ」

みんな、なかなか個性的な人が多いからね、あのクラスはと小さくささやいた。

「ああ、確かに、テンションと言うか、ノリはさすがというくらいに高かったですね…でもみんな仲が良くて、今だってこうして僕のために歓迎会をしてくれるなんて、本当に良いクラスだと思います」

「はは、そうだね。アスナ君をはじめ、みんないい子たちだよ。」

「やだ！高畑先生ってば！」

「そうですね。アスナもとてもいい子だと思います。今日なんかもお世話になりっぱなしで…」

「ちょっとライ先生まで！？」

「なんだい、驚いたなもうそんなに仲良くなったのかい？」

「はい、生徒と言うよりも友人と言つか…相談にも乗ってくれて、とても親身になってくれています」

僕よりも先生に向いてるんじゃないですかね、僕は笑った。

「もう！ライ先生！！何言ってるんですか！！」

「でも確かに今朝と比べて、ライ先生明るくなったというか、一気に表情が豊かになったね」

「それもアスナのお陰ですよ。でもさっきは失敗しちゃいましたけど…」

さっきの失敗を思い出し、憂鬱な気持ちになった。

「失敗？何をだい？」

「え？高畑先生もさっき…見たんでしょ？」

「ん？さつき？なんのこと」「あはははは、高畑先生！！気にしないでください！なんでもありませんから」「おいおいアスナ君？」

と、アスナは高畑先生の背中を押し向こうへ追いやった。

「アスナ？どうしたんだ？」

「いえいえ、なんでもありません。もう、ライ先生気にしすぎですから！！もうその話題は禁止ですよ！！！」

「？そうかな」

「そうなんです！！ってこのか！？なんでニヤニヤこっち見てんの！？？」

気がつけば近衛木乃香がこちらの様子を伺っていた。

「ややなあアスナ。ニヤニヤやなんて…微笑ましいな思っただけやんかー。」

「微笑ましいって何がよ！？？」

「んー？アスナ気づいとらんのんかー？やっぱり微笑ましいなあ」

うふふと木乃香が意味ありげに笑う。

「こんばんはーライ先生、こうやって話すんは初めてやんなー？うち近衛木乃香っていいいますー」

「こんばんは近衛さん。これからよろしく頼む」

「うちなー、アスナのルームメイトなんよー。何か聞きたいことあったら何でも言ってなー？」

「ん？ああ、それはありがたいな？」

「ちょ、このか！？あんた何言ってんのよー！」

「アスナ？どうかしたのか？」

何を急に慌てだしているのだろう。

「なんでもないです!!」

「うふふーほんま微笑ましいなあ。ところでなあライ先生、ひとつ聞きたいことあるんやけどせっちゃん…桜咲さんとは知り合いなん？」

「桜咲？ああ、刹那か彼女にはここに来たばかりの時、学園長の頼みで生活に必要な学園の案内と、生活に必要なものの買い出しを手伝ってもらっていたんだ。それがどうかしたか？」

「え？ああ、そやったんかあ。いやあなんでもないえー」

と顔に暗い影を落としている。何かあったのだろうか？

アスナも桜咲さんとこのかってなんか接点あったっけー？と首をひねっている。

「そうか。何かあったらなんでも言ってくれ。僕に出来る事なら力になる。まあ僕もまだここに来たばかりで頼りがいはいないかもしれないが…」

「へへへーおおきにー頼りにしてますえー。なんや先生うちらとあ

んまり歳変わらんはずやのに大人っぽくてかつこええなあ。なんてゆーか、貫禄？みたいなもんがあるわー。（これならおじさまにしか興味なかったアスナが惹かれるんもわかるわあ）」

最後、木乃香が何やら呟いた。

「こここここここのか！？なに变なことを言ってるのよ！？」

アスナにははつきりと聞こえていたらしい。

「あーアスナ、すまんなあつい本音が…」

「本音？さっきの聞こえなかったんだが、なんて言っただ？」

「それはなあ、アス」あー！あー！このか！！見てみて！！あっち！あの空！今UFOみたいの見た！行こ！！」

え？ほんまに？行くいくー。ほなライ先生とりあえず失礼しますー」

「またね、ライ先生！！」

「ああ、また」

嵐のように去っていった。何だったんだろう。

一人になってしまった。そこで僕はずっと気になっていた世界樹と呼ばれる大木に近づいてみることにした。

世界樹に近づきその大きな幹にそっと触れようとした。すると

「ライ先生？」

世界樹の影にいたらしい桜咲刹那に声をかけられた。

「刹那、こんな所にいたのか。皆の中にいなかったから少し気になっていたんだ。」

「あ、その、騒がしいのは少し苦手で……」

「そうだったのか、僕のために付きあわせてすまなかった」

「いえ！すみません！それは全然いいんです！！私も、ライ先生のこと歓迎してますし。その、ちょっと人の輪に入るのが苦手と言うだけで……」

「そうだったのか…ありがとう」

「いえ、そんな」

「それにしても、こんな歓迎会を開いてもらえるとは思わなかったよ。嬉しい反面申し訳なさもあるな」

「どうしてです？」

「うん？何て言うか、自分はここにいて良いんだろうかって。まあ今日で大分気持ちも落ち着いてきたし、やっぱり素直に嬉しいかな」
そう言い自分の頬が緩んだのがわかった。

「ふふ、よかったですね。ライ先生、まだ一日しか経っていないのに昨日とは別人みたいです」

「そうかな？緊張が溶けたんだろうな」

ははつと僕は笑った。

「ライ!!」

何事かと思い振り返ると、エヴァンジェリンがいた。

「ああ、エヴァンジェリン。どうした？」

「…せっかくの歓迎会だ。一杯やらないかと思ってな」

そう言うエヴァンジェリンの右手にはジュースの入ったグラスが握られていた。

「ああ、もちろん。嬉しいよ。そうだ、刹那も一緒に」

「なんだ、いたのか桜咲刹那」

「…はい、ずっといましたよ」

「いくらなんでも隣にいるのに気付かないのはおかしいだろう…」

「まあいい、せっかくのライの歓迎会だ。ここは大人しく乾杯する
としようか」

「は、はい…そうですね」

エヴァンジェリンの高圧的な態度に刹那が圧されぎみだ。

「では、乾杯」

「「乾杯」」

そしてジュースを飲み干した。

「あの…エヴァンジェリンさんとライ先生は知り合いなんですか？」

刹那がおそるおそる尋ねた。

「ああ、そうらしい。申し訳無いことに僕は覚えていないんだが…」

「え…本当にエヴァンジェリンさんの知り合い…なんですか？」

「なんだ？私がこいつの知り合いだと、何か貴様に不都合なこともあるのか？」

「…いえ、ありませんが…」

「ふん、余計な詮索はするな。こいつの身元は私が保証する。ついでに貴様の護衛対象に危害をくわえるようなこともない。それから、このことは、他言無用だ。特にじじいには」

「……学園長はこのことを知らないんですか？」

「言う必要もないし、言いたくもない。私にだって知られたくないものも、守りたいものだってある。貴様と同じように、だ。わかるだろう？」

「……わかり、ました。ですが一つ確認が……すみませんライ先生、少し失礼します」

そう言い二人は僕には聞こえぬよう、少し離れたところで会話を始めた。

さっきの会話…本人を前にしてえらく重たい話をしていた。護衛がどうの、秘密がどうの、と。

まず、護衛対象と書いていたが刹那は誰かを護衛しているのだろうか？それで常に得物を？
なにか隠し事もあるようだ。

そして、僕とエヴァンジェリンが知り合いであつたと言つことを学園長に隠す必要があるらしい。

これは何故だろう。

彼女が吸血鬼だということに関係があるのか、はたまた、僕自身に問題があるのか、なんにせよ僕の勘でしかないが、学園長に伝えるとなるとなぜか嫌な予感がする。なにかよくない感じがするのだ。

これからは誰かに聞かれても、僕とエヴァンジェリンの関係は黙っておくことにしよう。

様々な可能性を考えているうちに二人が戻ってきた。
詮索は、しないでおくべきか。

「待たせたな」

「おかえり。早かったね」

「まあな。少し確認されただけだから」

「へえ、確認、ね」

「気になるか？」

「自分が関わっていきそうだし気になると言えば気になるけど、わざわざ離れてするような話だ。僕に聞かれては困るんだろう?。」

「ふむ、私は困らんが、どちらかと言うと困るのはお前だろうな」

「僕がか?それは、聞きたいような聞きたくないような、なんとも気味の悪い感じだな」

「ふふ、どうしても聞きたければ教えてやるさ。」

「そうだな、今の状況がもっと落ち着いて、聞く気になったら聞く」

少なくとも、今困り事が増えるのは困る。
学校になれたり、記憶を探したり、ただでさえやるのがたくさんあるのだ。

「ふむ、まあそのとき教えるかは私の気分次第だ」

「はは、なんだそれは。ああ、あと刹那」

「え?あ、はい」

「さっきの話を聞いた限りじゃ君もなにかと大変なこと、してるんだろ。何かあったら何時でも言ってくれ。一人じゃどうにもなら無いこともあるって、僕は初日でいきなり学んだところだから」

と、僕は思わず苦笑した。

明日菜が励ましてくれていなければ、僕は今でも悶々としていただろう。

誰かに言われて初めて気が付くこともあるのだ。

「でも、先生は…」

「ふむ、やっぱり僕に知られては困ることか…だったら、エヴァは知ってるんだろ？なら、エヴァにでも相談してみたり、頼ってみたりしてみたらどうだ？」

「え、エヴァンジェリンさんですか！？いや、それは！」

「なっ！馬鹿か！嫌に決まっているだろう」

二人は突然の提案に驚き、エヴァンジェリンに至っては大ブーイングだ。

「なにか問題でもあるのか？」

「問題だ！ちよつとお前には言えない感じに問題なんだ！それに、そんな義理はない！」

「わ、私も…問題ないと言えば無いような気もしますが、なんとなくか、その発想はなかったといえますか…どうなのでしょう？」

「刹那、さっき護衛をしているというようなことを言っていたな。君が誰を守って、何を隠しているのかは僕には全然わからない。でも、誰かを守りたいなら、誰にも頼らないでっていう考えは危ない、一人で抱え込んでいたら守りたいもの、守りきれなくなるかもしれない、と僕は思う。」

何故だかわからないがそんな気がする。何故だろう。記憶も無いのに胸が締め付けられる思いがした。僕は昔、何かを経験したんだろうか？

「先生…？」

「ライ…」

そんな僕を刹那とエヴァンジェリンが心配そうに見ていた。二人の視線に含まれている心配の意味は、恐らく違ふのだろうと思った。

何故だかしんみりしてしまった空気を振り払うため、僕は努めて明るく言う。

「というわけで、だ。エヴァ、刹那が何か相談してきたら、絶対のつてやるんだぞ。刹那も、言いたくなったら僕でもエヴァでも、好きな方に相談してくれ」

「っだが、しかし…っ」

「エヴァ…」

僕はエヴァンジェリンをじっと見つめた。

しばらくにらみ合いならぬ見つめ合いが続き、やがてエヴァンジェリンは根負けしたのかため息をついた。

「はあ、わかったよ。まあ、こいつが私に相談などしてくれると思えんし、取りあえずは引き受けてやるさ」

「うん、いい子だ。聞き分けのいい子は好きだな」

エヴァンジェリンの頭を強めにわしゃわしゃと撫でた。

「な、ちょ、すっ！？ってやめんか！！子供扱いするな！！」

そう言われああ、そう言えば600歳だったか、子供でもなかったな子供扱いはあるか、と撫でるのをやめ、頭から手を離す。

「あ…」

するとエヴァンジェリンがなんとも言えない表情をした。

名残惜しそうな、捨てられた子猫のような。

なんとなくもう一度頭に手を載せてみた。

明らかに表情が変わった。

おもしろい。

とりあえず、子供扱いするのをやめようと思ったのは撤回しよう
と心に決めた。

するとくすぐすと刹那が笑いだした。

「あ、ごめんなさい、つい、笑ってしまいました。ちょっと今まで
エヴァンジェリンさんのこと、誤解していたみたいです」
くすぐすと今も笑っている。

「桜咲刹那！なんだそれは！馬鹿にしているのか！？」

刹那に掴みかかろうとするエヴァンジェリンの頭をがっしりとホル
ドし、それを阻止する。

「なあっ！？離せ！ライ！」

「いいから落ち着け」

それすらもツボに入っただようので、刹那は笑い続ける。

「笑うなああああ！」

刹那の笑いが治まるのに数分を要した。

「あ、あのありがとうございます。なんですが、お二人を見ていたら元気が出てきたというか、自分の在り方をもう少し楽に考えられるような気がしてきました。」

今は無理ですが、決心できたらライ先生にも話せる時がくればいいなって思います。エヴァンジェリンさんもよろしくお願いしますね。」

「くううう！なんだ！？取って付けたように！もう知らん！知らんからな貴様なんぞどうなろうと」

「エヴァ」

僕は一言たしなめた。するとエヴァは大人しくなってくれた。

なんだかよくわからないが、刹那に、僕の言わんとすることが上手く伝わったようでよかったと思う。どこか論点がずれてしまった感があるのだが、もともと主語のなかった話だ。別のことでも刹那が抱えていた何かを軽くできたようなのでよしとしよう。

二人をつれて皆が集まっている広場に戻った。

すると今度はうちのクラスの朝倉和美に声をかけられた。

「ライイせんせー！！私、報道部の朝倉和美だけど、先生について新聞書きたいからインタビュー、受けてくれませんか！？」

「インタビュー…？僕なんかのことでいいなら別に構わないが…別に面白いことは無いと思うぞ？」

「いーのいーの！そんなこと心配しないで！じゃあまずはプロフィールから、お名前は！？」

「ライ・シルヴァニアだ。そんなところから聞くのか？」

「とーぜん！じゃあ次年齢と身長、体重！」

「16歳、身長は…正確にはわからないが179くらいか？体重は測っていないからわからない」

「おお！先生背えたかー！じゃあ本題、前にも聞いたけど好きなタイプ！名指しじゃなくて性格とか！」

和美がそれを聞いた瞬間何故か周囲に緊張が走った気がした。

「好きなタイプ、か。難しいな。そうだな、何かに一生懸命な人は好きだな。特に自分の身を省みない人なんかはつい力になりたくなるかもしれない。信念がある人って、素敵だと思うな」

「……あ、はっ！……なるほどなるほど。じゃあ次行きます！1日目にしてうちのクラスの神楽坂明日菜さんとは随分仲がよろしくなっているようですが、これについては？」

「はっ！？ば！朝倉！何言ってるのよ！そついうのやめてよね！！」

話を聞いていたらしいアスナが身を乗り出す。

「まあまあ明日菜、慌てない、慌てない」

「慌ててなんかいいわよ！！」

一瞬の沈黙の後、クラス中が急に騒ぎだした。

アスナが正直に言えと言うから言ったのだが、何か間違えたのだろうか？

「ララララライ先生！？何をおっしゃられておりますでしゅか！？」

「どうした！？日本語がおかしくなっているぞアスナ！？」

そして倒れたアスナに慌てて駆け寄る。すごく熱い。

「あかん、アスナがオーバーヒートしてる…それにしても先生、なかなか言いよるなあ」

「何かおかしいこと、言っただけかな？正直に言っただけなんだが…」

「おかしいことは言うくらんけどなー…ま、ええわ。ライ先生はその方がええ」

意味がわからない。

そしてさっきからエヴァンジェリンがどういふことかと僕をガクガクと揺さぶってくるのだがどうにかならないのだろうか。
みんな一体どうしてしまったというんだろう…

この騒ぎが収まるにはまた数時間かかり、そして会はお開きとなった。

（私というものがあんならあああああ！！）

（だから私には高畑先生が…ああああダメもう意味分かんない）

銀王と麻帆良10月2日? (後書き)

だんだんキャラが崩壊してきたような。

おかしいな、シリアスなギアス編のような雰囲気になりたいと言う当初の目的は、私の萌えの為にログアウトしたようです。

今回、ロスカラ本編で好きなセリフ、使わせていただきました。記憶を頼ったので一字一句同じということはないでしょうが…。ライカレの会話やバイです。萌えが。多分またやってしまうと思います…。ああいうことをさらっと言う辺りがライの真骨頂だと思っております。天然なのか無自覚なのか…はたまた…

感想、評価等ありましたら是非よろしくお願いします。嬉しいです。

銀王と麻帆良10月6日

「明日菜ーもうお昼やでーそろそろ起きなー」

「ん、ん……もうちょっと寝かせてよー木乃香ー」

ライ先生の歓迎会を行なってから4日ほど経ち、今日は土曜日。普段バイト早起きしている身としてはこういうとき寝溜めしておきたいという願望がわいてくるもので、今も現在進行形で布団の中。

それに最近、ライ先生が来てからと言うもののどうにも眠れない夜を過ごしている気がする。

ライ先生と言うのは10月の始めと言う何とも微妙な時期に副担任としてやって来た不思議な先生。

不思議なところと言うのは、まず先生と言ってもまだ16歳で、私と3つしか変わらないところ。

16歳で教師になれるのか疑問だけど、ブリタニアの大学を卒業しているらしいからそういうものなのかもしれない。いやでもこれも表向きの肩書きだったなとふと思い返す。

そして容姿。何と言っても目を惹く容姿なのだ。整った顔立ちにスラリとした長身、白い肌、そして一際目を惹く銀髪に蒼い瞳。そし

て若いのにスーツ姿もよく似合っていて、本人は自覚していないみたいだけど、とにかく…目立って、ここ、麻帆良学園にはちよつと変わった人が多いけど、ライ先生も変という意味ではなくて、とにかくどこか人間離れした雰囲気をもっている。

整いすぎた顔立ちと、冷たい蒼い瞳のせいかな、冷たい印象はあるけど、話してみたら記憶喪失の自分のことよりも、周りの人のことを心配しているような優しい人だった。

そう、彼は記憶喪失らしい。記憶喪失のせいなのかどうなのかはわからないけど、最初はこれでもかと言うほど無表情だった。今ではもうそんなことはなく時折柔らかい微笑を浮かべるようになってる。

最初無理矢理笑ってもらったときは、ぎこちなくて、ひきつり笑いと言いか、まるで凶悪犯かというような顔をされたけど、それもいい思い出だ。

そして記憶喪失なのだ少し困ったように言うライ先生に、私はどこか親近感のようなものを感じていた。

私も昔のことは覚えていない。似たような境遇の人と出会ったのは初めてだったから、そういうものを感じたんだと思う。

それで、何故私が眠れない夜を過ごしているのか？
そんなの、ライ先生に聞きたいくらいである。

ライ先生と出会ったのは今週の月曜日を無視するならば、その翌日にあたる火曜日だ。

私が新聞配達のバイトへ向かう途中、一人で歩いているライ先生に声をかけたのがきっかけ。

話してみると、ライ先生は今の自分の状況に戸惑っていたみたいで、気がつけば私も記憶喪失だったことを明かし、力になると言っていた。

そしてその日の放課後から、私の中の何かが悶々とし始めていた。そう、あの人は絶対天然だと思う。彼の言うこととやることに一々惑わされてはいけない。

わかっている。わかっているのだけど。

君と話す機会を増やしたかったとか言ったり、ふとした拍子の微笑みだとか、カッコいいと見せかけて可愛かったり、その逆もしかり、仕事はしっかりしているのに、日常生活では、どこか抜けていてギャップ萌えと言うやつだろうか…とにかくいちいちドキリとしてしまうことをする人なのだ。極めつけは歓迎会での一件。

私と仲良くなって満更でもないとか言い出したのよあの人は！

ここまで来ると勘違いしないレベルを越えているんじゃないかと私は思う！

っていうか勘違いしない人がいるのかと私は問いたい！

いやいやいやいや落ち着け明日菜。素数を数えるのよ……ん？素数
って何よ？

…素数って何なのかについて考えていたら落ち着いてきたわ。結果
オーライね。

そもそも、私には高畑先生のような素敵なおじさまが好みなのであ
って、ライ先生みたいな若い優男風な人は範疇外だ。

だから別にライ先生のことなんて……ことなんて……
いやでもライ先生ってなんか放っておけないし、放っておいたらダ
メな気がする。

そう、それに私のような勘違いしそうになる人を増やさないために
も、私がライ先生の記憶探しのお手伝いをして…

べ、別に他の誰かと親しげに歩いているライ先生を想像して、なん
かやだなとか思った訳じゃないんだから！

あくまでもそう、勘違いしてしまう人を増やさないようにしないと
って言う……あれ？でも待つてよ？なんで勘違いする人が増えたら
ダメなんだっけ？あれ？あれ？

と毎回ここで思考停止して悶々とした夜を迎えるのだ。

「明日菜ー？いいかげん起きやー」

再び木乃香の声がして私はのそりと起き上がった。

「もー…明日菜ってばー明日のライ先生とのデートが楽しみやから
って寝付けんのはわかるけど、いくらなんでも寝過ぎやでー」

時計を見れば時計の短針は1時をさしていた。

「な、何言つてんのよ！デートなんかじゃないわよ！ただ道案内するだけで…！」

そう、明日、日曜日、私はライ先生に道案内することになっていた。
学園内はあらかた見て回ったので今度は学園外だ。

「ふふふ、もう、明日菜ー照れんでもええやんかー」

「だから照れてなんかないってば…！」

「はいはい、まんざらでもないまんざらでもない」

「もー！！それ引つ張り過ぎだつてば！！今週クラスですつとそう

やっていじられてんだからね！！全く……ライ先生が変なこと言うから……」

「でも明日菜やってまんざらでもない言われてまんざらでもなさそうじゃん」

「そっそんなことっ！！」

「ほんまに嫌なら道案内なんかせんはずやしなー」

「い、いやだからそれはっ」

「はいはいわかったわかった、ほなそういう事にしとったるわ。それより明日菜顔洗ってき、お昼ごはんできとるで」

「もー……なによその顔は……ご飯ありがと木乃香」

そして私は顔を洗って身支度を整え、このかが作ってくれた昼食を食べた。

翌日曜日、昨日とは打って変わって私は木乃香に起こされること

なく朝早く目が覚めた。

こんな事だからまた木乃香にやっぱ楽しみやったんやなーとかからかわれてしまうんだろうなと私は一人ため息を付いた。

待ち合わせは8時に学園の門。今の時間はまだ6時。私はゆっくりと支度を始めることにした。

「ほな、明日菜、頑張ってきー!!」

「頑張るって何をよ…」

「そんなんアピールやアピール!!ライ先生この一週間でクラスにも馴染んできて、競争率高くなってきてみたいやで」

「競争率ー?何よそれ…だから私は関係ないってば!」

「そんなん言つとる場合ちゃうで明日菜。ライ先生、学園内を結構歩きまわつとるうちに、結構な数の女子生徒のハートを射止めとるつてもつぱらの噂やでー!!」

「へ、へえーそうなんだー。射止めるって例えばどんな感じなの?」

「やっぱ気になるんか明日菜。ふふ、かわええなあ。何でもな、困つとる生徒がおつたらそれはもう親切に対応したり、ナンパで困っている生徒を助けたり、例えるなら王子様のように颯爽と現れて、爽やかに去っていく感じみたいらしいなあ。密かにファンクラブができてるゆー噂もあるわ」

歩くフラグ建築士だとか、白銀の君だとか色々通名がついてきとるらしいでと木乃香が言う。

「へ、へえー… たった一週間の間でそんなことになってるんだ…」

「せやから明日菜！頑張らんと！！」

「う、だから私はどうでもいいってば！！もう、出かけるから！！行ってきます！！」

「おじさまもええけど、うちもライ先生素敵やと思うでー。とにかく頑張りやー。行つてらっしゃい」

だから、何を頑張れっていうのよ！！そんなんじゃないってば！！そんなことを考えているうちに学園の門の前に着いていた。時刻は7時50分。待ち合わせ10分前だ。

「おはよう、明日葉。すまないなこんな朝早くから付きあわせて」

「っライ先生！おはようございます！」

先に着いていたらしいライ先生が門の影からひょいと出てきて声をかけられた。

私は昨日や、朝に木乃香に言われたことを思い出して思わず顔が熱くなってしまった。

「どうした？顔が赤いみたいだけど…もしかして体調悪い？」

心配そうに声をかけてくるライ先生に私はますます顔が熱くなってくるのを感じた。

「ひゃっ！？」

ふいにライ先生が私の額に手を当てられた。熱くなった体に冷たい手が心地よい。しかしますます熱くなってくる。

こういうことを自然とやっちゃうんだもん！本当に心臓に悪い。

「やっぱり、熱いな。風邪かもしれない。帰ろつか？」

「い、いえ！違います！！これ平熱なんです！！私昔から体温高くて！！」

あなたのせいですよ！！などといえる筈もなく、あははーと何とかごまかそうと必死に笑う。

「そう、なのか？どこも体調悪くない？」

「ええ、もう、バッチリですよ！！昨日もよく眠りましたし！健康そのものです！」

「ならよかった」

とライ先生が安心したように微笑んだ。

何をするにしてもいちいち優雅な感じがするのはなんでだろうか…もしかするとブリタニアの貴族だったりとかするのだろうか。

それより、今問題なのは、この間ずっと額に手を当てられているというこの現状。

そろそろ限界だ。恥ずかしすぎる。

「あの…ライ先生？その…手をそろそろ…」

「あ。ああ、すまない」

忘れていたというようにライ先生は私の額から手を離した。

「い、いえ、心配してくれてありがとうございます」

「固いな…」

「え！？おでこが…ですか!？」

いきなり何を言い出すのだろうかこの人は!？そもそもおでこに固いとか柔らかいとかあるのだろうか。

いやでも、言われるなら固いより柔らかいほうが良かったかもと、よくわからないながらに落ち込んでしまう。

「いや違う違う。おでこじゃないよ。話し方。ずっと思ってたんだけど明日菜、どちらかと言うと敬語とか苦手だろう？無理に敬語で話さなくてもいい。普通に、同級生と話すように話してくれてかわない」

なんだ、話し方だったのか。おでこじゃなくてよかったと謎の安堵感が生まれた。でも、

「いいんですか？やっぱり年上だし、先生だし…」

「先生といつても、肩書きだけだし…ああ、もちろん仕事はちゃんとするが。敬語使っていないとか気にしないよ。最初からタメ口の生徒なんて何人もいるし。それに…もしかしたら僕のほうが年下かもしれないぞ？」

「さすがに年下には見えませんって!!」

「あはは、まあ、さすがに年下はありえないけど、普通に話してく

れたほうが僕は嬉しいな。敬語って、他人行儀みたいで、明日菜に敬語使われると、やっぱりちょっと、寂しいかな」

来た…これだ…こういう発言に私はいちいちドギマギしなければならぬのだ。しかもどうやら心からそう思っているらしく、本当に寂しそうな顔をするのでたまったものじゃない。

下心がないのがタチがいいのか悪いのか疑問なところだ。

「わ、わかりました！敬語やめます！だからその顔やめてください
！！」

「それ、敬語なんだけど…っていうかその顔って？」

「あ、えと、わかった！わかったから」

「あ、なんか新鮮だな。敬語じゃない明日菜」

さっきの寂しそうな顔から一転してうれしそうに笑う。初日の無表情は一体どこへ行ったのか。まるで子供かというようにコロコロと表情が変わる。

そういうところにキュンとしてしまうこれは、母性本能とでも言うのだろうか？

え？あれ？私キュンとしちゃってたの！？なんで！？あれ！？わかんない！！

あまり考えても悶々としてしまうのでさっきの感覚は心の奥底にしまうことにする。

「あ、あと、別に先生もいない。正直、先生っていう柄じゃないし」

「いや、さすがにそれは…それにライ先生すごく立派に教師やっていると思っんですけど…」

「そうか？それは嬉しいが…大丈夫だよ。エヴァなんかも普通にライって呼んでくるし…あと明日菜、敬語、戻ってる」

「あ、ごめん。だって、エヴァちゃんは昔の知り合いだったからじゃ…」

「それもあると思うが、昔のことは僕もまだ思い出せていないし、それに、大切なのはこれからだって言ったのは明日菜だろう」

ふ、とライ先生が不敵に笑った。あ、こんな顔もするんだと場違いなことを思いつつ私はライ先生に答える。

「わ、わかったわ。ライ…先生」

ちょっと待って、なんか無理いきなりは無理！！照れくさいってい

うか恥ずかしいっていうかなんか無理！！

「…明日菜？」

「ライ…」

「うん。何だ明日菜？」

っ！！何このやりとり！？こんなのまるで…

「ってライが呼ばせたんでしょ！！何だって…なによ！？」

「はは、そうだったな。すまない」

「もう！ライの馬鹿！！そろそろ行くわよ！！」

「了解。今日は宜しくお願いします、明日菜隊長」

「ふふふ、ライ隊員、泥船に乗ったつもりで着いて来なさい！！」

そして私たちは電車に乗り東京方面へ向かった。

（明日菜、泥船は沈むんだよ？）
（あれ？そうだったわけ？）

銀王と麻帆良10月6日（後書き）

とりあえず投稿。

次の話投稿するにあたって問題点…

東京埼玉行ったことないので何もワカラナイヨという…

原宿？渋谷？新宿？秋葉？距離感とかお店とか一切ワカラナイヨー。
いやいや、ここからここへは行かねえだろ！！とか矛盾があっても
これはファンタジーの東京なんだと思って見逃してください。10
0%妄想の東京です。

きつと詳しくは書きませんけど…

ご感想等有りましたらぜひお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5740t/>

銀王と...

2011年11月20日15時08分発行